

平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、 唐橋遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一七―六

平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、唐橋遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、
唐橋遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、宅地造成に伴う平安京跡（西寺跡）、唐橋遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

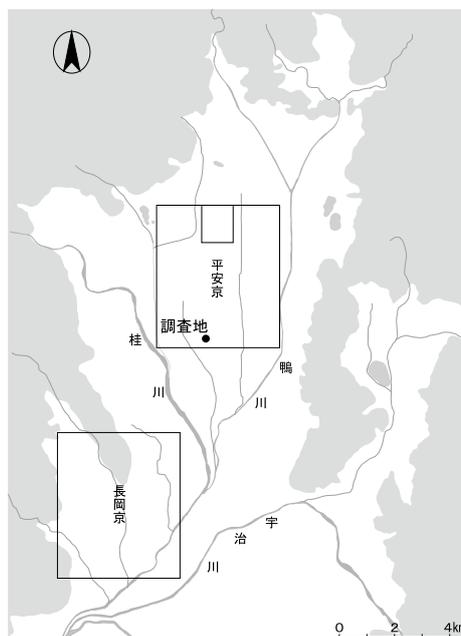
平成29年11月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（西寺跡）、唐橋遺跡（京都市番号 16 H 688）
- 2 調査所在地 京都市南区唐橋門脇町21、22 - 1
- 3 委 託 者 株式会社中央住宅販売 代表取締役 郡 博史
- 4 調査期間 2017年5月22日～2017年6月29日
- 5 調査面積 313㎡
- 6 調査担当者 鈴木康高・木下保明
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「中河原」・「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 鈴木康高
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査に際して、藤井 整氏・若林邦彦氏よりご教示を頂いた。記して、感謝を申し上げます。

(調査地点図)



目 次

| | |
|----------------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| 2. 位置と環境 | 3 |
| (1) 位置と環境 | 3 |
| (2) 周辺の調査 | 6 |
| 3. 遺 構 | 9 |
| (1) 基本層序 | 9 |
| (2) 第2面(弥生時代)の遺構 | 9 |
| (3) 第1面-1(奈良時代以前)の遺構 | 17 |
| (4) 第1面-2(平安時代中期)の遺構 | 17 |
| 4. 遺 物 | 22 |
| (1) 土器類 | 22 |
| (2) 瓦類 | 25 |
| (3) 銭貨 | 27 |
| (4) 石製品 | 27 |
| (5) 骨 | 28 |
| 5. ま と め | 29 |

図 版 目 次

| | | | |
|-----|----|-----|--------------|
| 図版1 | 遺構 | 1 | 1区第2面全景(北から) |
| | | 2 | 方形周溝墓4(北西から) |
| 図版2 | 遺構 | 1 | 1区第1面全景(北から) |
| | | 2 | 2区第1面全景(東から) |
| 図版3 | 遺構 | 1 | 掘立柱建物1(北東から) |
| | | 2 | 井戸5(北から) |
| | | 3 | 溝9完掘状況(東から) |
| 図版4 | 遺物 | 土器類 | |
| 図版5 | 遺物 | 瓦類 | |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| 図1 | 調査地位置図（1：2,500） | 1 |
| 図2 | 調査前風景（南東から） | 2 |
| 図3 | 作業風景（北東から） | 2 |
| 図4 | 作業風景（北東から） | 2 |
| 図5 | 埋戻し状況（南東から） | 2 |
| 図6 | 調査区配置図（1：500） | 3 |
| 図7 | 周辺調査位置図（1：2,500） | 4 |
| 図8 | 調査区東壁断面図（1：50） | 10 |
| 図9 | 調査区南壁・西壁断面図（1：50） | 11 |
| 図10 | 第2面平面図〔弥生時代〕（1：150） | 12 |
| 図11 | 方形周溝墓1・2実測図（1：50） | 13 |
| 図12 | 方形周溝墓3・溝73実測図（1：50） | 14 |
| 図13 | 方形周溝墓4実測図（1：60） | 15 |
| 図14 | 溝71実測図（1：50） | 16 |
| 図15 | 第1面平面図〔奈良時代以前・平安時代〕（1：150） | 18 |
| 図16 | 掘立柱建物1実測図（1：50） | 19 |
| 図17 | 井戸5実測図（1：40） | 20 |
| 図18 | 溝9・60実測図（1：50） | 21 |
| 図19 | 弥生土器実測図（1：4） | 23 |
| 図20 | 古墳時代の土器実測図（1：4） | 23 |
| 図21 | 平安時代の土器実測図（1：4） | 24 |
| 図22 | 軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4） | 25 |
| 図23 | 丸瓦・平瓦・刻印瓦拓影及び実測図（1：4） | 26 |
| 図24 | 銭貨拓影及び写真（1：1） | 27 |
| 図25 | 石器実測図（1：4） | 28 |

表 目 次

| | | |
|----|---------|----|
| 表1 | 周辺調査一覧表 | 5 |
| 表2 | 遺構概要表 | 9 |
| 表3 | 遺物概要表 | 22 |

平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、唐橋遺跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市南区唐橋門脇町21番地で計画された宅地造成に伴い実施した。調査地は、北半が平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、南半が針小路、調査地全体が唐橋遺跡に位置する。

工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の試掘調査が行われ、弥生時代の周溝墓、平安時代の溝・柱穴などが確認されたため、発掘調査が必要であるとの指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、調査を実施することとなった。

調査区は、文化財保護課の指導により、逆「L」字形に設定した。調査面積は計313㎡である。場内で残土を処理するため反転調査とし、東半を1区、西半を2区とした。調査過程で、1区北半で検出した掘立柱建物1の規模を確認するため、西壁の一部を西側へ拡張した。

発掘調査は、1区から調査を始め、平成29年（2017）5月22日から掘削を開始し、調査・記録後6月14日に調査を終了した。翌日から2区の重機掘削を開始した。1区と同様に調査・記録後

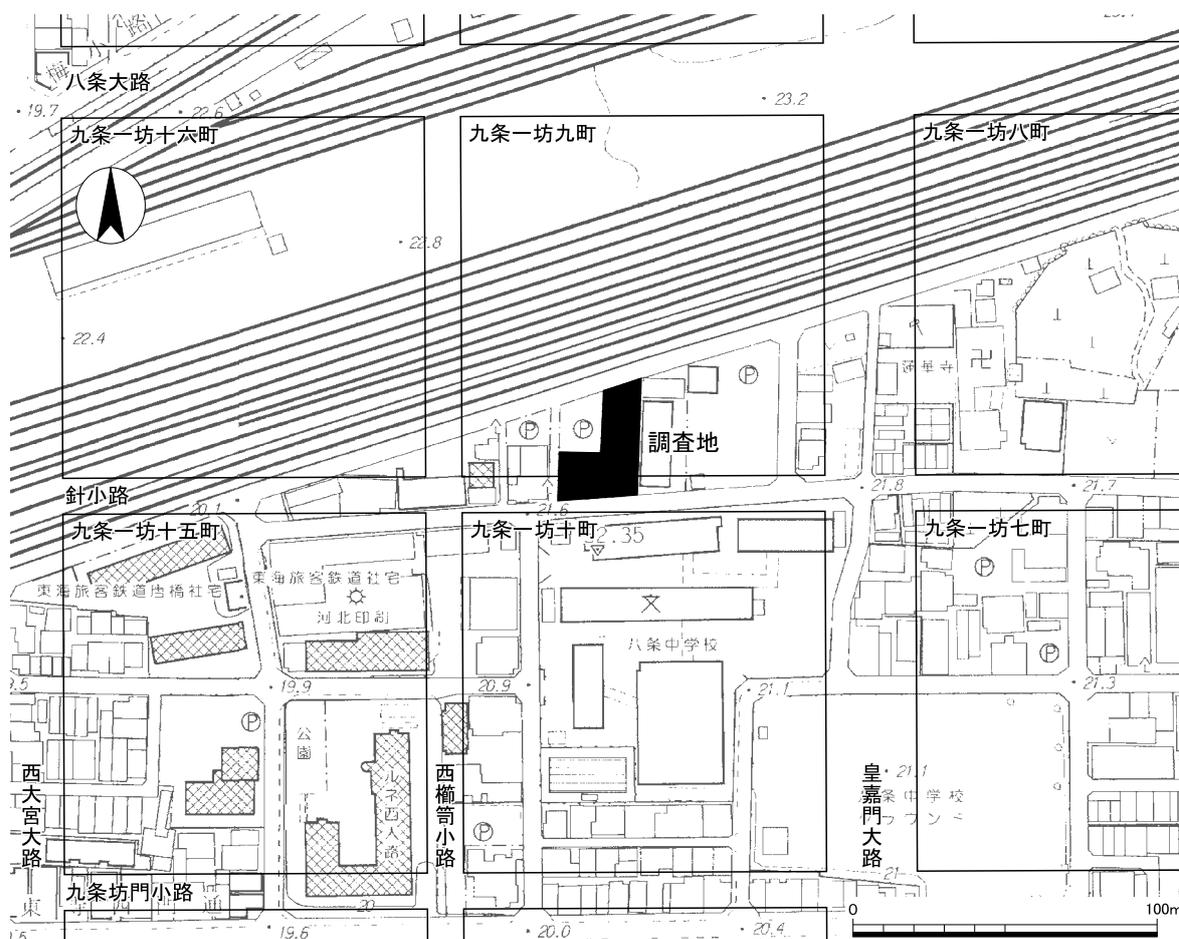


図1 調査地位置図（1：2,500）



図2 調査前風景（南東から）



図3 作業風景（北東から）



図4 作業風景（北東から）



図5 埋戻し状況（南東から）

埋戻しを行い6月29日に全ての調査を終了した。それぞれの調査面の調査終了時に文化財保護課の検査指導を受けた。

1区の南半で部分的に平安時代の整地土が存在するが、ほぼすべての遺構は地山面で検出した。遺構は弥生時代（第2面）、奈良時代以前の遺構を含む平安時代（第1面）に分けて調査・記録を行った。第2面では弥生時代の方形周溝墓や溝、第1面では奈良時代以前の掘立柱建物、平安時代中期の井戸・溝・区画溝などを検出した。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

平安京は京都盆地北部のほぼ中央に位置する。京内の地形は、鴨川・桂川やその他の小河川によって形成された複数の扇状地からなりたつ。調査地は、鴨川扇状地上に位置し、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する。

調査地点は平安京右京九条一坊九町から針小路にまたがり、西寺跡寺域と唐橋遺跡に該当する。

西寺は平安遷都（延暦13年）時に、東寺（教王護国寺）とともに朱雀大路を挟んで東西対称の位置に造営された官営の寺院である。両寺は、都である平安京ひいては国家を鎮護する役割を担うことを目的に造営された。その寺域は、南は九条大路、北は八条大路、東は皇嘉門大路、西は西大宮大路に囲まれた、東西2町、南北4町の8町域を占有する。南半4町が塔や金堂、講堂などの主要伽藍域、北半4町の実態は未だ不明な部分が多いが、政所院、大衆院、花園院、倉垣院といった運営機関が置かれたと想定されている。

西寺に関連する史料は少なく、多くは造営当初から10世紀初頭に集中している。その内容は、造営長官・次官や別当の任命、催事や施入の打ち分け、堂宇造営に関わるものである。

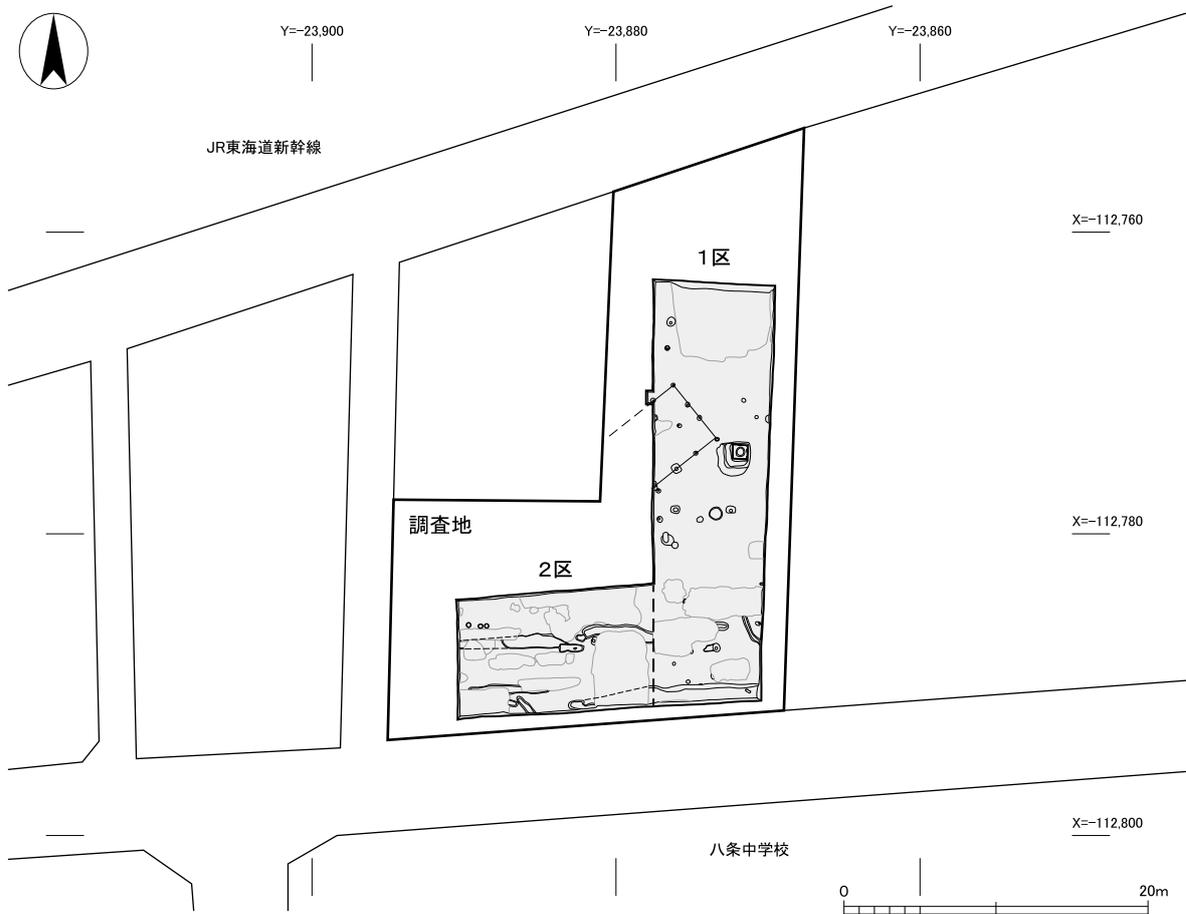


図6 調査区配置図 (1 : 500)

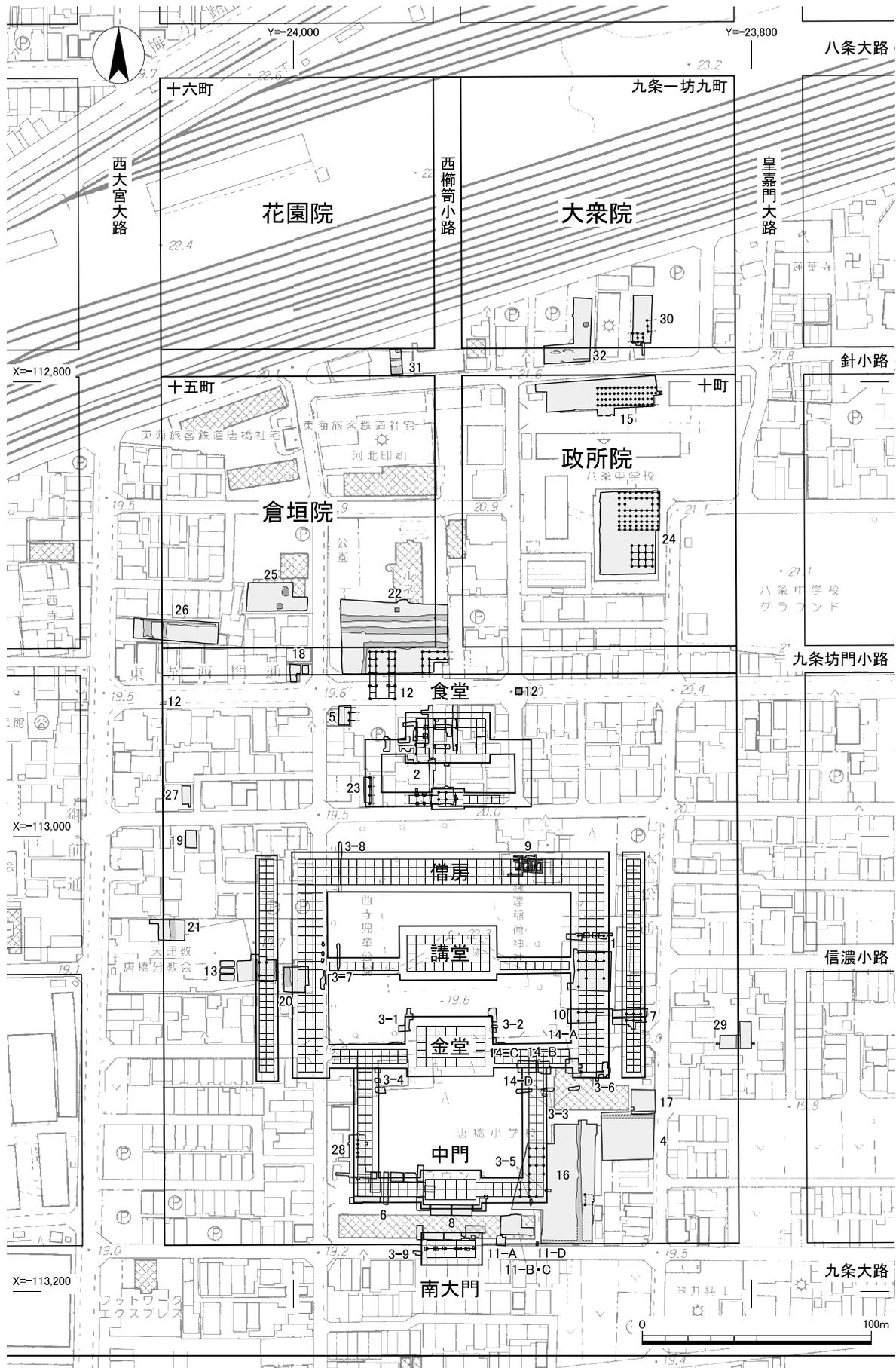


図7 周辺調査位置図 (1 : 2500)

表1 周辺調査一覧表

| 調査 次数 | 推定地 | 調査地 | 調査期間 | 調査機関 | 調査担当者 | 西寺跡関係遺構・遺物 | 西寺関係以外の 遺構・遺物 | 文献 |
|----------|------------------------|--------------------------------------|---------------------------|--------------|------------------------|--|-----------------------------------|---------|
| 1 | 東僧房 | 唐橋西寺町57 (西寺児童公園) | 1960/06/18 ～06/26 | 奈文研 | 杉山信三 | 基壇、礎石採取穴、礎石 | — | 1・2・3 |
| 2 | 食堂院 | 唐橋西寺町 | 1962/02/19 ～03/12 | 奈文研 | 杉山信三 | 食堂と南門の礎石採取穴、回廊 礎石・礎石採取穴 | 鎌倉以降の井戸 | 1・2・3 |
| 3 | 金堂・南大門・ 東西僧房 | 唐橋西寺町57ほか(西寺 児童公園・唐橋小学校・ 周辺道路) | 1962/09月 ～12月 | 奈文研 | 杉山信三 | 金堂基壇延石・地覆石、南大門 礎石採取穴、東僧房雨落溝・礎 石採取穴・基壇、西僧房礎石採 取穴、北僧房礎石採取穴、東回 廊延石・延石採取穴、西回廊地 覆石・地覆石採取穴、南回廊延 石、金堂軒廊延石・地覆石、講 堂軒廊礎石採取穴 | — | 1・2・4 |
| 4 | 国忌堂(御霊堂) | 唐橋西寺町65 (唐橋小学校内プール) | 1970/07/14 ～08/08 | 市教委・ 平博 | 伊藤玄三 | 東西方向の築地遺構・大溝 | 古墳中～後期の土器 | 1 |
| 5 | 大炊殿 | 唐橋西寺町40 | 1972/11月 ～12月 | 市保護課・ 鳥羽研 | 峰 颯・ 浪貝 毅 | 礎石採取穴 | 古墳中～後期の土器 | 1・5 |
| 6 | 中門・西回廊 | 唐橋西寺町65(唐橋 小学校内グラウンド) | 1973/07/25 ～08/20 | 市教委・ 鳥羽研 | 杉山信三 | 中門西縁基壇、西回廊雨落溝・ 暗渠 | — | 1 |
| 7 | 東小子房 | 唐橋西寺町64 | 1973/09/20 ～10/10 | 市保護課 | 浪貝 毅・ 玉村登志夫 | 東雨落溝、礎石採取穴 | — | 1・6 |
| 8 | 中門・東回廊・ 南大門 | 唐橋西寺町65(唐橋小 学校内グラウンド) | 1974/05/03 ～06/15 | 市教委・ 鳥羽研 | 杉山信三 | 中門延石・階段、東回廊延石 | — | 1 |
| 9 | 北僧房 | 唐橋西寺町57-1・2 (鎌達稲荷神社) | 1974/06/25 ～07月 | 市保護課 | 梶川敏夫 | 礎石採取穴 | — | 1・7 |
| 10 | 東僧房 | 唐橋西寺町57(西寺児童 公園内ちびっこプール) | 1977/05/16 ～06/04 | 京埋文 | 長宗繁一・ 吉川義彦 | 基壇西辺、礎石採取穴、西雨落 溝 | — | 8a・9a |
| 11 | 南限築地 | 唐橋西寺町65 (唐橋小学校) | 1977/08/01 ～08/23 | 京埋文 | 本 弥八郎 | 柱穴、溝状遺構、築地基底部 | — | 9b |
| 12 | 大炊殿・井戸 | 唐橋西寺町86 | 1978/01/10 ～01/27 | 京埋文 | 鈴木広司・ 長宗繁一 | 西限築地の凝灰岩暗渠、井筒組 井戸、食堂関係建物礎石採取穴 | — | 8b・9c |
| 13 | 西小子房 | 唐橋西寺町27 (天理教唐橋分教会) | 1977/11/07 ～11/30 | 京埋文 | 鈴木広司 | 基壇、礎石採取穴、西雨落溝 | — | 9d |
| 14 | 東僧房・東回廊・ 金堂東軒廊 | 唐橋西寺町65 (唐橋小学校) | 1978/08/24 ～08/31 | 京埋文 | 百瀬正恒 | 東僧房礎石採取穴・雨落溝、東 回廊礎石、東軒廊基壇・延石 | — | 10・11b |
| 15 | 西寺子院 | 唐橋門脇町35 (八条中学校) | 1978/11/21 ～1979/03/06 | 京埋文 | 平方幸雄 | 南北三間、東西十五間以上の掘 立柱建物、輪羽口出土 | 弥生中期の大溝・溝・ 土坑、室町の建物・井 戸 | 11a |
| 16 | 東回廊・国忌堂(御 霊堂)西築地・門跡 | 唐橋西寺町65 (唐橋小学校) | 1979/01/27 ～03/31 | 京埋文 | 堀内明博・ 本 弥八郎 | 東回廊基壇・礎石採取穴・延石 ・地覆石・羽目石、築地基底部 ・西雨落溝、門跡礎石・礎石採 取穴、南築地内溝 | 古墳中期の落込状遺構 | 11c |
| 17 | 境内 | 唐橋西寺町65 (唐橋小学校) | 1979/06/01 ～06/21 | 京埋文 | 磯部 勝・ 辻 純一 | 土坑、瓦溜り | — | 12 |
| 18 | 境内 | 唐橋門脇町2 | 1980/05/16 ～05/25 | 京埋文 | 鈴木広司 | 井戸、土坑 | 古墳中期の溝 | 13a・14a |
| 19 | 境内 | 唐橋西寺町33-3 | 1980/06/23 ～07/07 | 京埋文 | 堀内明博 | 土坑、集石 | 古墳前期の流路 | 13b・14b |
| 20 | 西僧房 | 唐橋西寺町30 (天理教唐橋分教会) | 1980/08/01 ～08/13 | 京埋文 | 長宗繁一 | 基壇、溝状落込、柱穴 | 古墳の流路 | 13c・14c |
| 21 | 西限築地 | 唐橋西寺町30 (天理教唐橋分教会) | 1981/02/03 ～02/20 | 京埋文 | 平尾政幸 | 築地状遺構、溝状遺構(内溝?) | — | 13d・14d |
| 22 | 北限築地・網所 | 唐橋門脇町29・30・31・ 44の一部 | 1986/06/02 ～10/06 | 京埋文 | 鈴木久男・ 磯部 勝・ 堀内明博 | 礎石建物、築地跡、溝、塀跡、 井戸、土坑 | 古墳の堅穴建物、中世 以降の溝・井戸 | 16a |
| 23 | 食堂院 | 唐橋西寺町55-2 | 1986/11/05 ～11/19 | 京埋文 | 堀内明博 | 西回廊基壇、礎石採取穴、西雨 落溝、土坑、鉄滓・埴埴出土 | 奈良前期の流路、鎌倉 ～室町の溝 | 15・16b |
| 24 | 西寺子院 | 唐橋門脇町35 (八条中学校) | 1988/09/08 ～12/28 | 京埋文 | 菅田 薫 | 掘立柱建物、礎石建物 | 弥生の溝、古墳の焼土 ・流路、飛鳥の土坑、 鎌倉の井戸 | 17a |
| 25 | 西寺子院 | 唐橋門脇町6・7 | 1989/01/17 ～03/15 | 京埋文 | 菅田 薫 | 柱穴、溝、土坑、井戸、輪羽口 ・鉄滓出土 | 弥生～古墳の土器 | 17b |
| 26 | 西限築地 | 唐橋門脇町4-1 | 1990/11/08 ～12/20 | 関文会 | 吉川義彦・ 鎌田博子 | 築地基底部、東側溝、内溝、東 西溝 | 古墳の土器、江戸の井 戸 | 未報告 |
| 27 | 西限築地 | 唐橋西寺町35-12 | 2007/02/16 ～03/02 | 京埋文 | 能芝妙子 | 湿地状落込、土坑、柱穴 | 古墳の土器 | 18 |
| 28 | 西回廊 | 唐橋西寺町69 (唐橋小学校) | 2007/07/23 ～08/20 | 京埋文 | 柏田有香 | 柱穴列、東西溝、西回廊基壇整 地土 | — | 19 |
| 29 | 東限築地 | 唐橋花園町9-8、9-9、 9-11 | 2013/11/18 ～12/10 | 京埋文 | 東 洋一 | 築地基底部、西側溝、内溝 | 弥生～古墳の流路 | 20 |
| 30 | 西寺子院 | 唐橋門脇町23-14 | 2016/05/09 ～06/17 | 京埋文 | 李 銀眞 | 掘立柱建物、柱穴列 | 弥生中期の方形周溝墓、 古墳後期の土坑 | 21 |
| 31 | 西寺子院 | 唐橋門脇町17-5 | 2016/10/03 ～10/21 | 京埋文 | 近藤奈央 | 井戸、溝、土坑 | 弥生中期の溝・落込み | 22 |
| 32 | 西寺子院 | 唐橋門脇町21、22-1 | 2017/05/22 ～06/29 | 京埋文 | 鈴木康高 | 井戸、溝、土坑 | 弥生中期の方形周溝墓 ・溝、奈良以前の掘立 柱建物 | 本報告 |

※調査機関：「京埋文」は財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、「奈文研」は奈良国立文化財研究所、「市教委」は京都市教育委員会、「平博」は平安博物館、「市保護課」は京都市文化観光局文化財保護課、「鳥羽研」は鳥羽離宮跡調査研究所、「関文会」は関西文化財調査会を指す。

造営長官に関わる記述の初現は、延暦15年(796)の藤原伊勢人の造営長官任命である。平安京遷都直後から本格的な造営が進められていたことを物語る。その後も造営長官・次官の入れ替わりの記述は定期的に見られる。

造営に関する記載としては、延暦19年(800)の東・西寺造営のために、巨樹の伐採が許されていることから、この頃には造営に着手していたことがわかる。弘仁3年(812)には屏風や障子が施入され、布施内親王の墾田772町の施入、東大寺の封戸のうち官家功德封物二千戸を造東西寺司に充てるなど造営が一定進み、寺院運営の基盤整備も進んでいったようである。また、弘仁4年(813)に夏安居が行われていることから、この頃には堂舎が一定整い、寺院としての整備が進んでいたことが窺える。さらに嘉祥3年(850)、刹柱に落雷し、その竿を剥ぎ取ることや、元慶6年(882)には、山城・大和・伊賀国から西寺塔料に充てることが見え、塔の造立にも着手した様子が窺える。

その後、西寺は正暦元年(990)に火災に遭う。この時の被災範囲や規模は不明であるが、同年8月の光孝天皇の国忌は西寺で行うことができないので東寺に移して行われていることから、一定の被害があったことがわかる。また、保延2年(1136)には南別院が焼失、仁安2年(1167)には綱所が仁和寺に移されるなど西寺が衰退していく様子が窺える。建久年中(1190～1199)には、文覚による塔婆修理が行われるが、天福元年(1233)には塔も焼亡してしまい、西寺は廃絶へ向かっていく。

応仁・文明の乱後、大永7年(1527)に西寺に陣をおいたことが史料に現れる。乱の後も不安定な情勢が続き、戦火がくすぶり続ける状況の記載と捉えられる。この当時の西寺の機能や建物の様子は不明だが、少なくとも西寺の名や位置関係は認識されていたようである。

参考文献

杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』 角川書店 1994年

東寺創建一千二百年記念出版編集委員会編『新東宝記』 東京美術 1996年

(2) 周辺の調査(図7、表1)

西寺跡は、古くから金堂土壇と考えられてきた高まりが残っており、大正10年には国の史跡に指定されている。この土壇は、後に東寺伽藍との位置関係から講堂であることが判明し、昭和34年以降、土壇がある児童公園周辺や南に隣接する唐橋小学校の校舎建設に伴う発掘調査が継続して行われ、伽藍配置の状況が明らかになってきている。

伽藍域で検出した建物跡は、南大門・中門・金堂院回廊・金堂・東西僧房・東小子房・食堂院などである。その伽藍配置は東寺と同様で、主要伽藍は南北中軸線上に配置される。中門から回廊が派生し金堂に取りつく。金堂北側の講堂を置き、講堂の北と東西の三面に僧房を配置する。

北僧房の北側では食堂院と綱所関係の建物跡、綱所関係建物跡の北側では東西方向の築地塀とその溝を検出した(22次調査)。この築地塀は、東寺の中仕切り築地塀と対応するもので、九条坊

門小路よりやや北側に築かれる。この中仕切り築地塀より北側の4町が附属院地となる。附属する各院は、北東隅の大衆院から時計回りに、政所院、倉垣院、花園院が想定されている。

一方、寺域北半部の附属院地での調査は、伽藍域に比べ少なく、様相が不鮮明な部分が多い。

倉垣院（九条一坊十五町）では、建物跡は確認できていないものの、井戸や土坑、西大宮大路東側の築地塀と側溝を検出している。土坑からは焼土、灰炭と共に鉄滓・鞆羽口が多く出土しており、造営に伴う工房と考えられる。

政所院（九条一坊十町）では、建物を4棟検出した。15次調査では南北3間×東西15間以上の掘立柱建物、24次調査では南北2間×東西5間の四面庇建物、南北2間×東西7間の掘立柱建物、南北3間×東西3間の総柱礎石建物を検出した。

大衆院（九条一坊九町）では、これまで2棟の小型掘立柱建物を検出している（30次調査）。針小路北築地推定ライン上では、針小路に関連する遺構は検出されなかった。

花園院（九条一坊十六町）と倉垣院の間に位置する針小路推定地で行われた調査では、東西方向の溝と井戸を検出した（31次調査）。東西方向の溝は針小路路面推定地のほぼ中心に位置しており、大衆院の調査成果と併せて針小路が条坊計画ラインには施行されていないことが明らかとなった。

また、西寺以前の遺跡である唐橋遺跡では、弥生・古墳・飛鳥時代の遺構・遺物が検出されている。近年の調査の通目すべき成果として、30・31次調査で中期前葉の方形周溝墓が複数検出されており、この時期の墓域の存在が明らかになりつつある。

表1 文献

- 1 杉山信三『史跡 西寺跡』 鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
- 2 杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1964年
- 3 杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1962』 奈良国立文化財研究所 1962年
- 4 杉山信三「西寺跡第3次発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1963』 奈良国立文化財研究所 1963年
- 5 杉山信三・井上満郎・木村捷三郎・浪貝 毅「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1972』 鳥羽離宮跡調査研究所 1974年
- 6 浪貝 毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡 西寺跡・鳥羽離宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1973 - II』 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 7 梶川敏夫「史跡 西寺跡 - 北僧房跡発掘調査概要 -」『鳥羽離宮跡・史跡 西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1974 - IV』 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 8 a 長宗繁一・鈴木久男「西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報 1977年』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年
b 長宗繁一・鈴木久男「西寺井戸跡」同上
- 9 a 「平安京右京九条一坊、西寺跡1」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
b 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」同上

- c 「平安京右京九条一坊、西寺跡3」同上
- d 「平安京右京九条一坊、西寺跡4」同上
- 10 百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要』（『京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』）京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 11 a 「平安京右京九条一坊十町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
 - b 「平安京右京九条一坊・西寺跡1」同上
 - c 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」同上
- 12 「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 13 a 鈴木廣司「西寺跡発掘調査 第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
 - b 堀内明博「西寺跡発掘調査 第18次発掘調査」同上
 - c 長宗繫一「西寺跡発掘調査 第19次発掘調査」同上
 - d 平尾政幸「西寺跡発掘調査 第20次発掘調査」同上
- 14 a 「平安京右京九条一坊、西寺跡1」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
 - b 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」同上
 - c 「平安京右京九条一坊、西寺跡3」同上
 - d 「平安京右京九条一坊、西寺跡4」同上
- 15 堀内明博「西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
- 16 a 磯部 勝・鈴木久男・堀内明博「平安京右京九条一坊1」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
 - b 堀内明博「平安京右京九条一坊2」同上
- 17 a 菅田 薫「平安京右京九条一坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
 - b 菅田 薫「平安京右京九条一坊2」同上
- 18 能芝妙子「平安京西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 19 柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 20 東 洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 21 李 銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-4 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 22 近藤奈央『平安京右京九条一坊十五・十六町跡（西寺跡）、唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8・9)

調査地の現地表面は、標高21.3～21.5 mで、北から南へ向かって緩やかに傾斜する。

基本層位は、調査区東壁のX= - 112,788付近を基準とする。地表下0.04～0.32 mまでが現代盛土、これより下層が近代の耕作土 (厚さ0.04～0.12 m)、平安時代の整地土 (東壁18層、厚さ0.08～0.2 m)、地山である褐色砂泥となる。

平安時代の遺構は黒褐色砂泥からなる整地土の上面で成立しているが、この整地土は1区南部のみに分布しており、大半は地山である黒褐色・灰黄褐色砂泥の上面で成立している。一方、奈良時代以前 (弥生時代を含む) の遺構は全て地山上面で成立している。

調査は、古墳時代以降の遺構 (第1面) と弥生時代 (第2面) に分けて調査し、第1面はさらに奈良時代以前 (第1面-1) と平安時代中期 (第1面-2) に細分できる。

(2) 第2面 (弥生時代) の遺構 (図10、図版1)

検出した弥生時代の遺構は、方形周溝墓と溝である。検出した方形周溝墓4基全ての墳丘盛土は、後世の削平を受け残っていなかった。また、埋葬施設は確認できなかった。

方形周溝墓1 (図11、図版1) 1区北西隅で検出した。確認できたのは南辺の周溝の一部のみである。東側は攪乱により掘削され、西側と北側は調査区外に続く。周溝は幅約0.8 m、深さ約0.4 mである。周溝の断面形は逆台形状で、埋土は黒褐色砂泥である。

方形周溝墓2 (図11、図版1) 1区北西部で検出した一辺6 m以上の方形周溝墓である。西側は調査区外に続く。周溝は幅0.8～1.2 m、深さ0.3～0.45 mである。方位は東辺の溝を基準とすると北に対して約36°西に振る。周溝の断面形は逆台形やU字状である。埋土は主に黒褐色砂泥である。南辺に比べ東辺の溝幅が広い。

方形周溝墓3 (図12、図版1) 1区北東部で検出した一辺6 m以上の方形周溝墓である。北側は攪乱により削平され、東側は調査区外に続く。周溝は幅0.7～1.3 m、深さ0.4～0.5 mである。方位は西辺の溝を基準とすると北に対して約14°東に振る。周溝の断面形は逆台形状を呈する。先行する溝73が埋没した後に掘削されている。

表2 遺構概要表

| 時 代 | 遺 構 | 備 考 |
|--------|------------------------|-----|
| 弥生時代中期 | 方形周溝墓1～4、溝71・73 | |
| 奈良時代以前 | 掘立柱建物1 (柱穴27～33・35・46) | |
| 平安時代中期 | 溝9・60・66、井戸5 | |

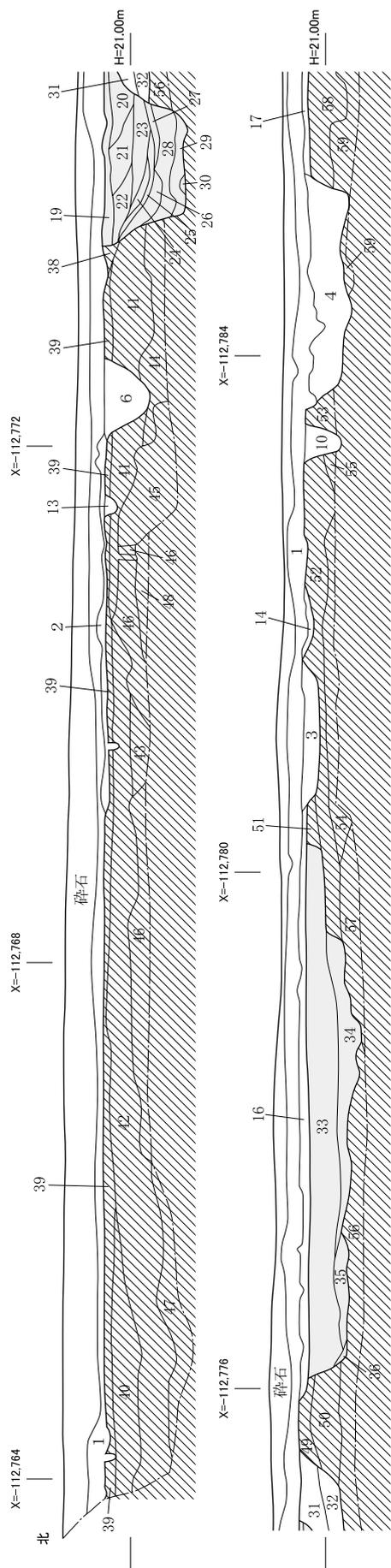


図8 調査区東壁断面図 (1:50)

- | | | |
|---|--|--|
| <p>1 近・現代耕作土</p> <p>2 10YR3/2黒褐色砂泥 炭ごく少量含む</p> <p>3 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥</p> <p>4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>5 10YR3/3暗褐色砂泥</p> <p>6 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1~2cmの礫ごく少量含む</p> <p>7 10YR3/2黒褐色砂泥 炭ごく少量含む</p> <p>8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土器片ごく少量含む</p> <p>9 10YR3/3暗褐色砂泥 炭・土器片ごく少量含む</p> <p>10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ5cmまでの礫少量、土器器片少量含む</p> <p>11 10YR3/1黒褐色砂泥 φ1~2cmの礫ごく少量含む</p> <p>12 10YR3/3暗褐色砂泥</p> <p>13 10YR3/2黒褐色砂泥 炭ごく少量含む</p> <p>14 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭・土器片ごく少量含む</p> <p>15 10YR3/1黒褐色砂泥</p> <p>16 10YR3/3暗褐色砂泥</p> <p>17 10YR3/2黒褐色砂泥</p> <p>18 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片ごく少量含む</p> <p>(平安時代整地層)</p> | <p>19 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量、土器片ごく少量含む</p> <p>20 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量、炭・土器片ごく少量含む</p> <p>21 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量、炭・土器片ごく少量含む</p> <p>22 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR4/3にぶい黄褐色砂泥ブロックごく少量含む</p> <p>23 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>24 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR4/2灰黄褐色砂泥</p> <p>25 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土混</p> <p>26 10YR3/2黒褐色砂泥に7.5YR5/8明褐色砂泥ブロック少量混</p> <p>27 10YR3/2黒褐色砂泥に7.5YR5/8明褐色砂泥ごく少量混</p> <p>28 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土ブロックごく少量混 φ0.5cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>29 10YR5/2灰黄褐色砂泥に7.5YR5/6明褐色砂泥中量混 φ3cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>30 10YR3/2黒褐色砂泥に7.5YR5/8明褐色砂泥中量混 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>31 10YR3/3暗褐色砂泥に7.5YR5/8明褐色砂泥ごく少量混</p> <p>32 10YR3/2黒褐色砂泥に7.5YR5/8明褐色砂泥ごく少量混 φ1~2cmの礫ごく少量含む</p> | <p>33 10YR3/2黒褐色砂泥</p> <p>34 10YR3/2黒褐色砂泥に7.5YR3/4暗褐色砂泥少量混 φ1~2cmの礫ごく少量、土器片ごく少量含む</p> <p>35 10YR3/1黒褐色砂泥に7.5YR3/4暗褐色砂泥少量混 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>36 10YR3/2黒褐色砂泥に7.5YR3/4暗褐色砂泥少量混 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>37 10YR3/1黒褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量含む</p> <p>38 10YR2/1黒褐色砂泥 φ2cmまでの礫少量含む</p> <p>39 10YR2/1黒褐色砂泥 φ5cmまでの礫中量含む</p> <p>40 10YR3/1黒褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量含む</p> <p>41 10YR3/2黒褐色砂泥 φ5cmまでの礫中量含む</p> <p>42 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫中量含む</p> <p>43 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ2cmまでの礫少量含む</p> <p>44 10YR3/3暗褐色砂泥 φ3cmまでの礫中量含む</p> <p>45 10YR3/3暗褐色砂泥 φ3cmまでの礫中量含む</p> <p>46 10YR3/2暗褐色砂泥 φ3cmまでの礫少量含む</p> <p>47 10YR3/2暗褐色砂泥 φ2cmまでの礫少量含む</p> <p>48 10YR3/3暗褐色砂泥に7.5YR5/8明褐色砂泥ごく少量混 φ1~2cmの礫ごく少量含む</p> <p>49 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>50 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>51 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>52 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1cmまでの礫ごく少量含む</p> <p>53 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ2cmまでの礫少量含む</p> <p>54 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1cmまでの礫中量含む</p> <p>55 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR3/4暗褐色砂泥小ブロック少量混</p> <p>56 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ5cmまでの礫中量含む</p> <p>57 10YR2/2黒褐色砂泥に10YR3/4暗褐色砂泥小ブロック少量混</p> <p>58 10YR4/4褐色砂泥</p> <p>59 10YR4/4褐色砂泥</p> <p>(方形周溝墓3)</p> <p>(方形周溝墓4)</p> <p>(地山)</p> |
|---|--|--|

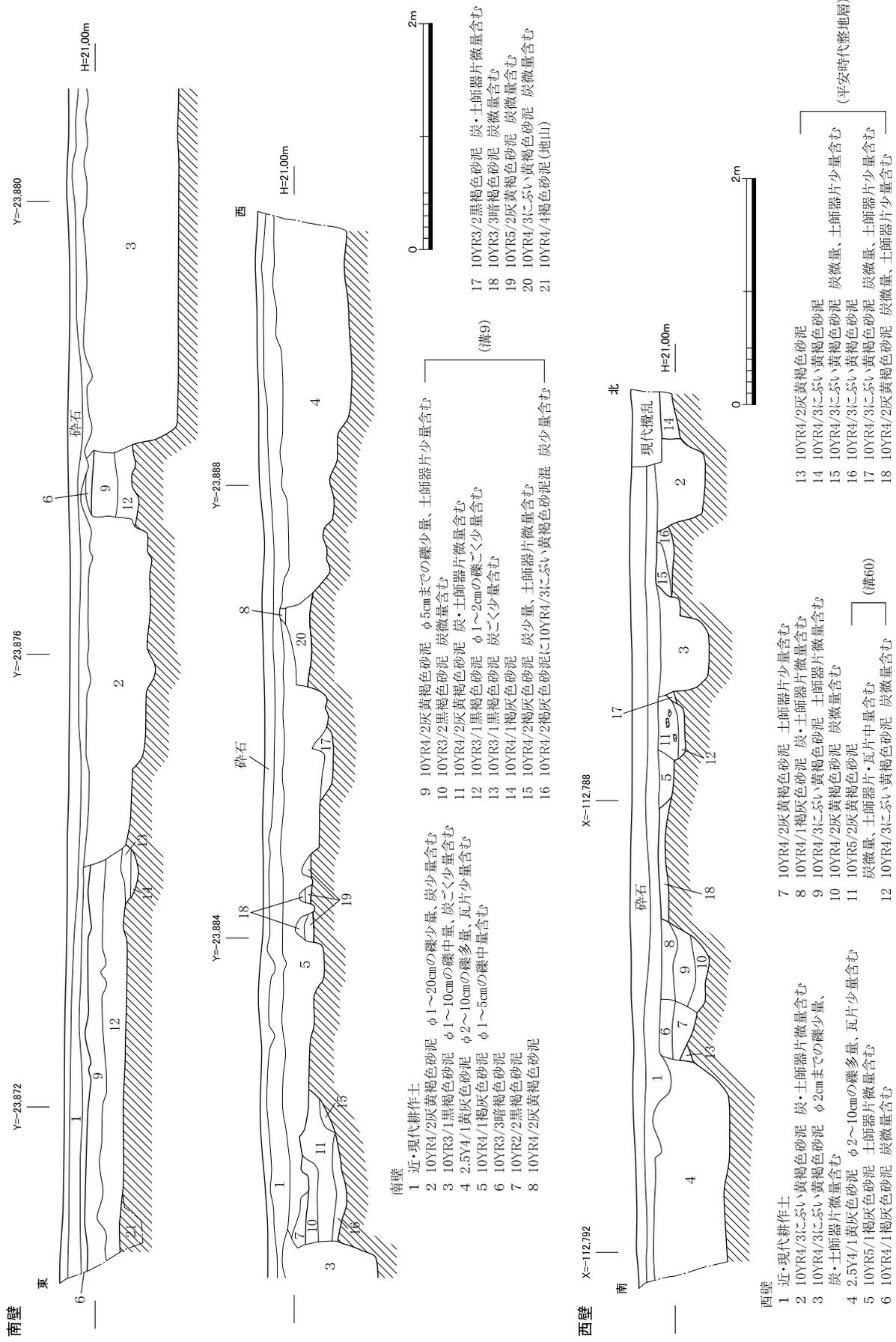


図9 調査区南壁・西壁断面図(1:50)

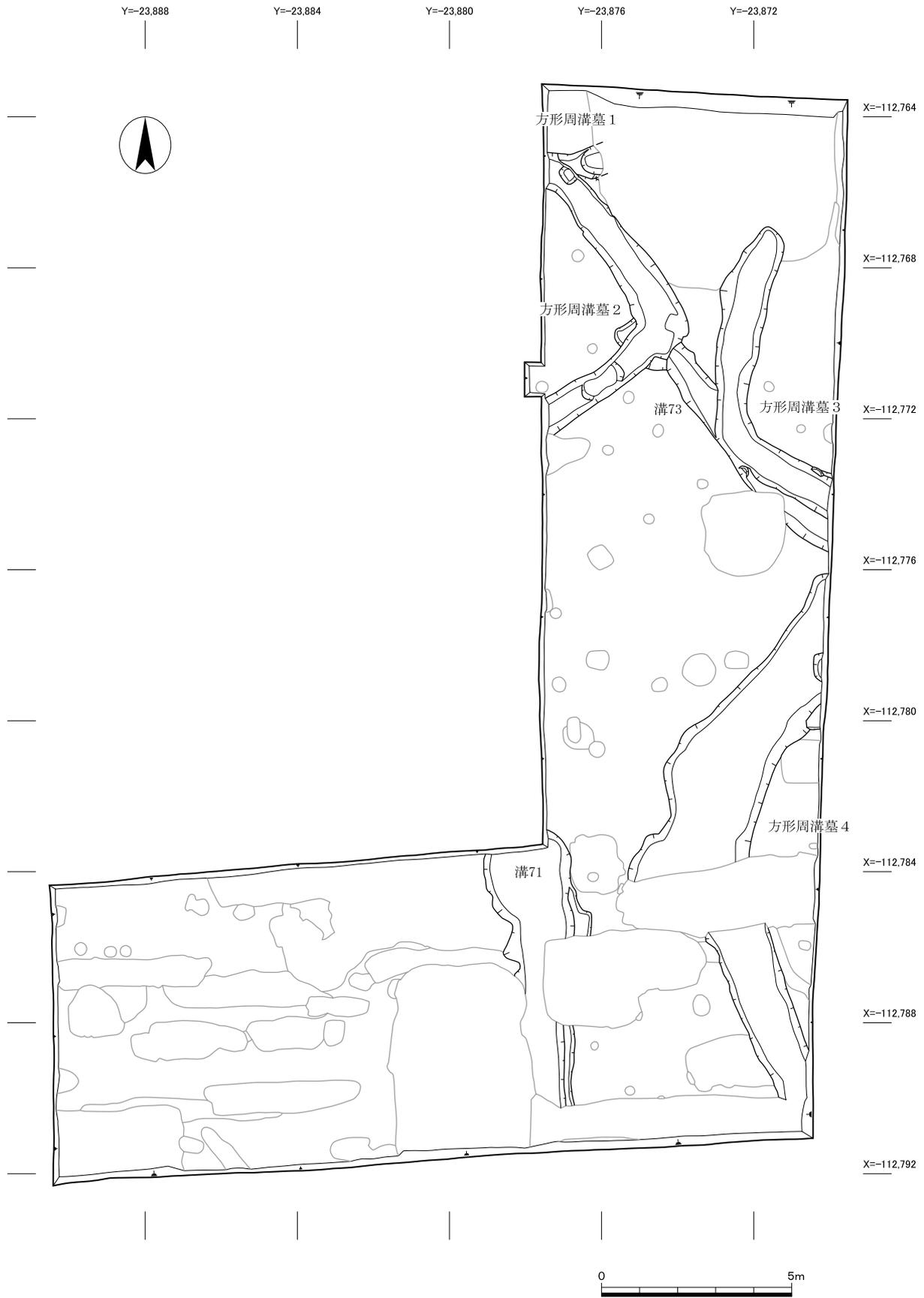


图10 第2面平面图〔弥生时代〕(1:150)

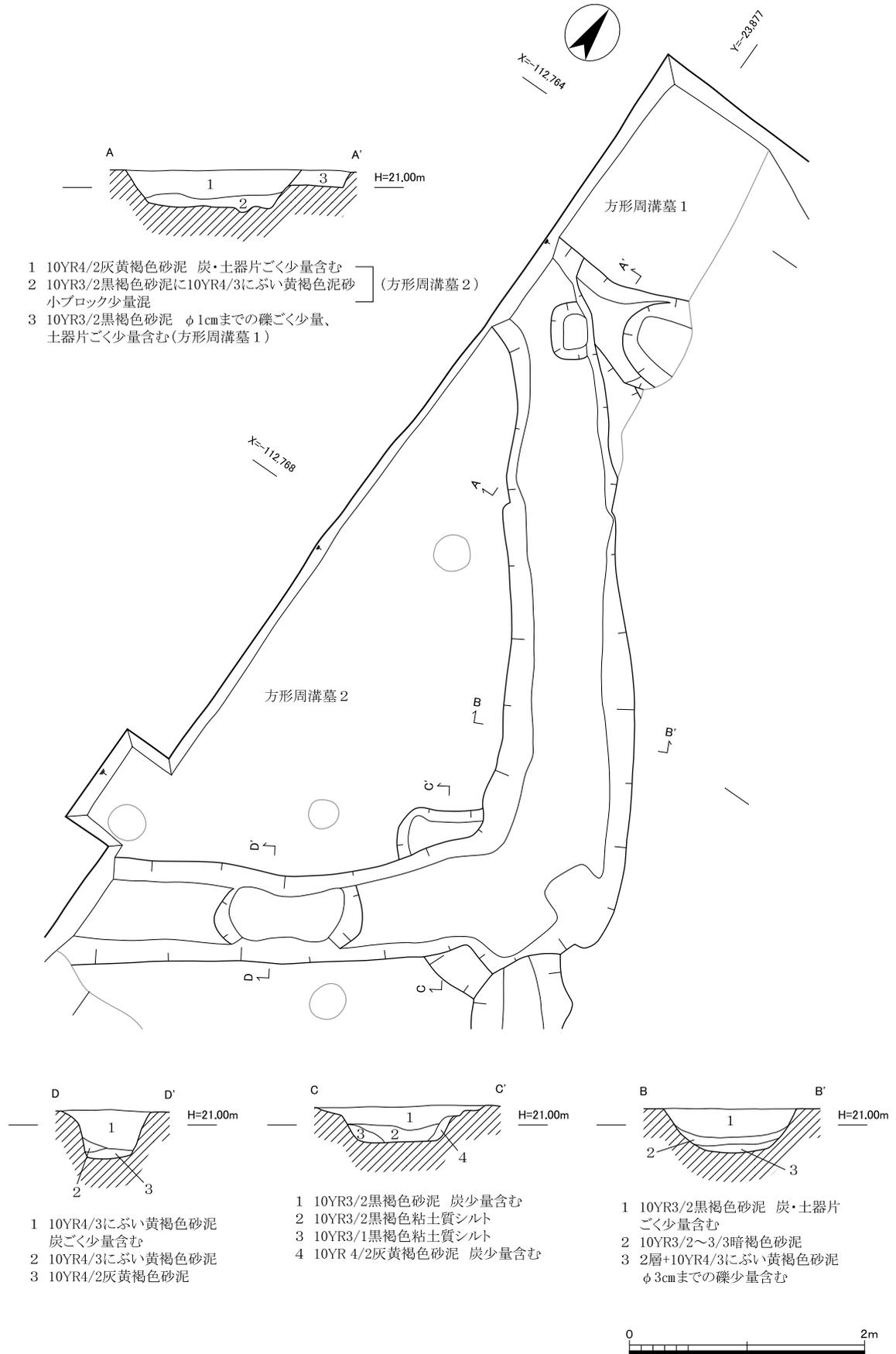


図11 方形周溝墓1・2実測図(1:50)

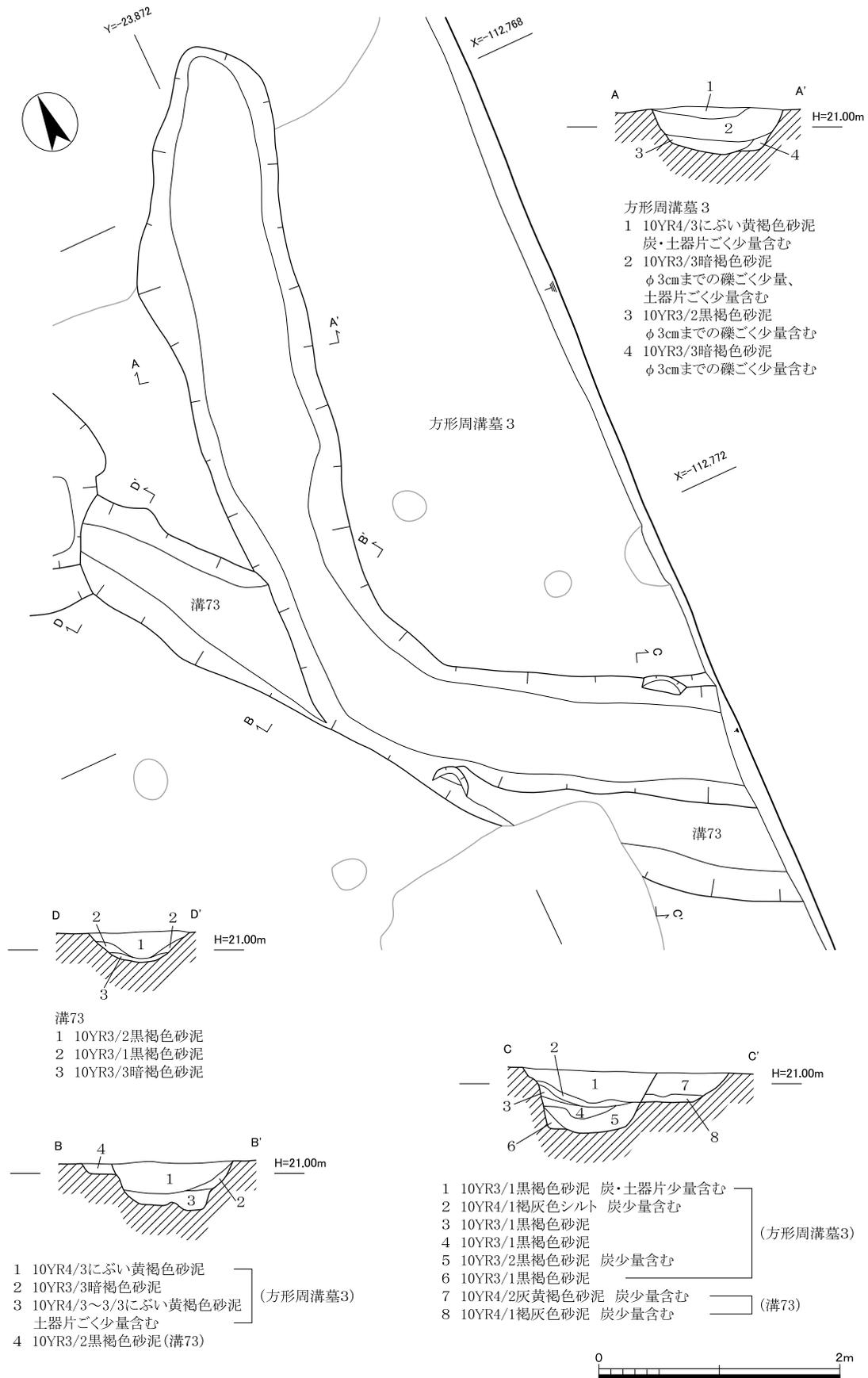


図12 方形周溝墓3・溝73実測図 (1:50)

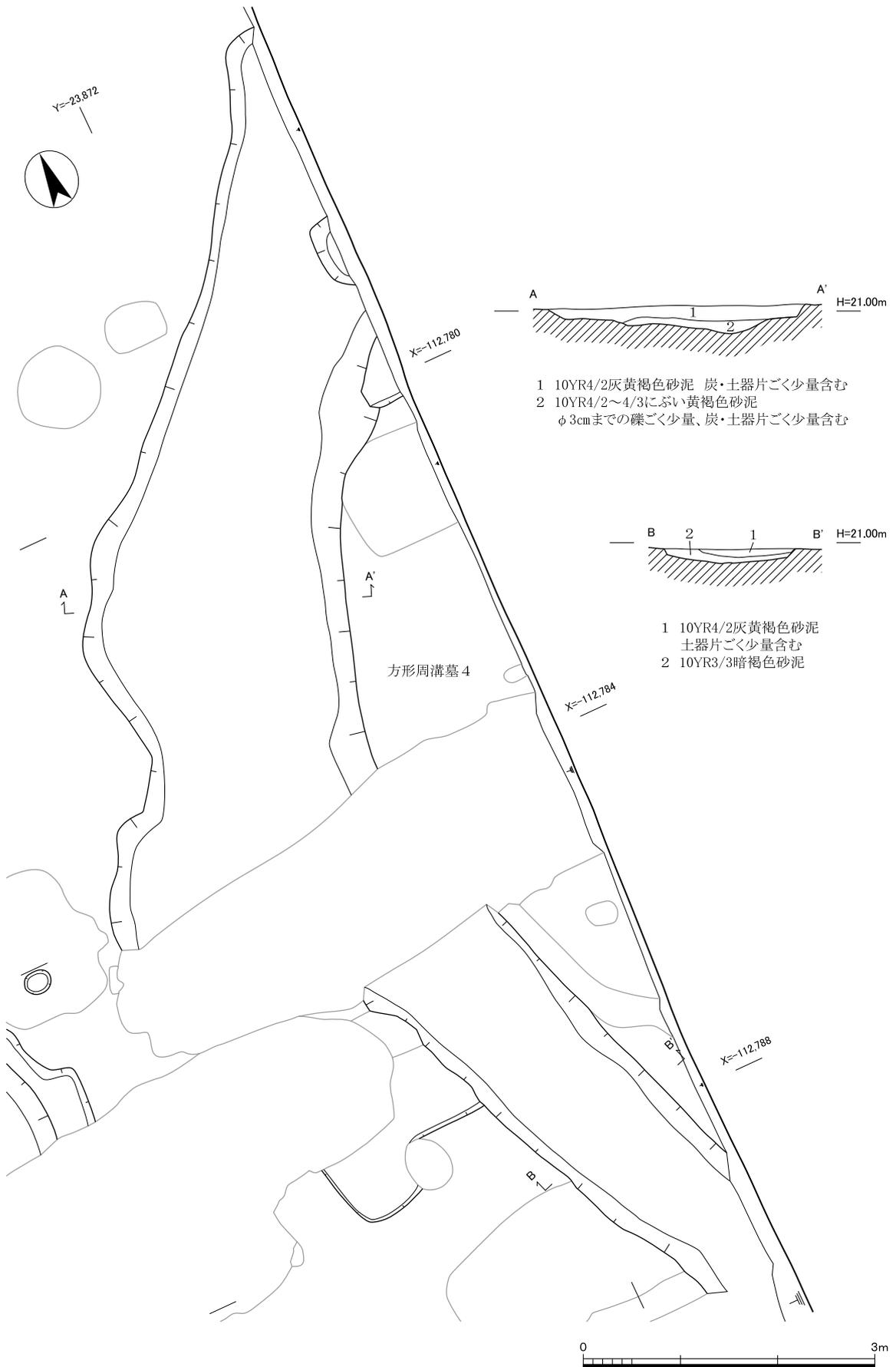


図13 方形周溝墓4実測図(1:60)

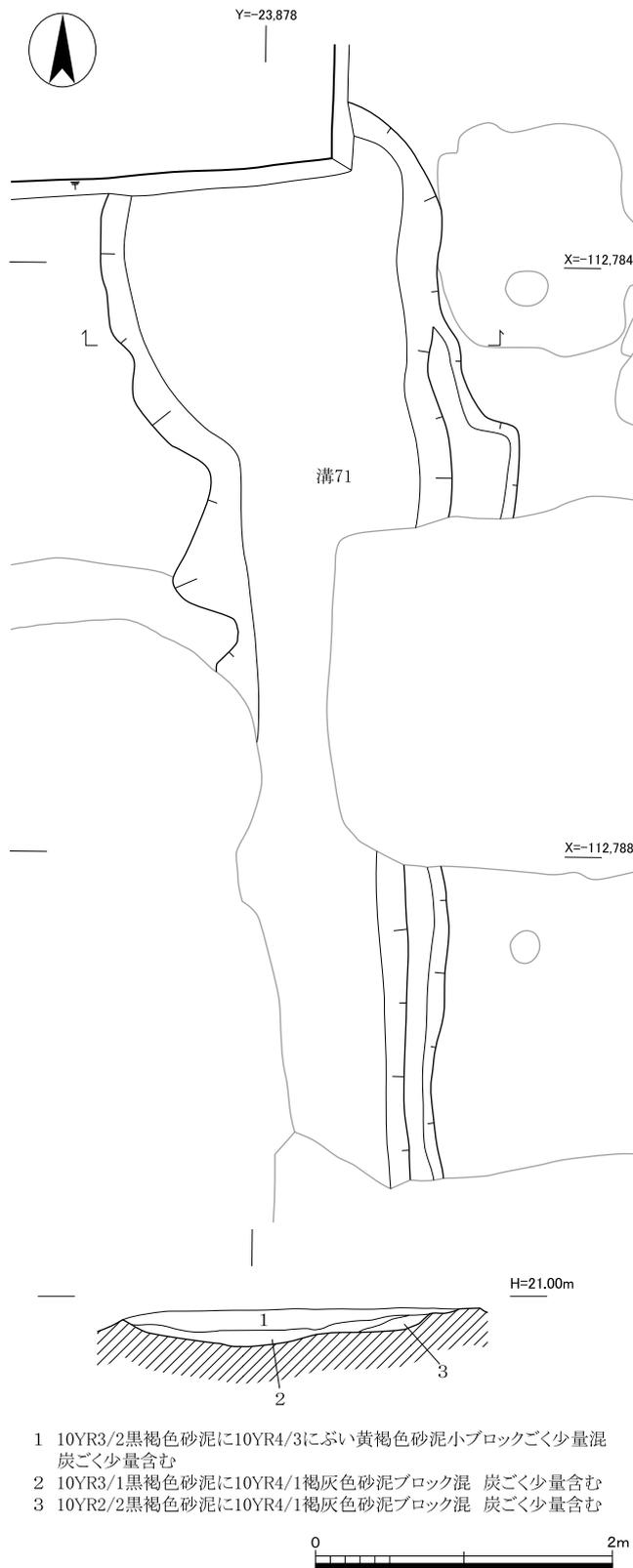


図14 溝71実測図 (1 : 50)

方形周溝墓4 (図13、図版1) 1区南東部で検出した一辺の長さが10m以上の方形周溝墓である。東側は調査区外に続く。周溝は幅1.2~2.8m、深さ0.2~0.3mである。西辺の溝の方位は北に対して約20°西に振る。周溝の断面形は底の幅が広い逆台形状を呈する。埋土は灰黄褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥である。他の墓に比べ周溝の幅が広く、浅いのが特徴である。周溝内側の斜面際の埋土 (A-A' の2層) から弥生土器が出土した。弥生時代中期と考えられる。

溝73 (図12) 方形周溝墓2の南東部から方形周溝墓3の南西部にかけて検出した、どの方形周溝墓の辺も形成しない溝である。検出長は約2.5m、幅0.8~0.9m、深さ約0.25mである。断面形は緩いU字状を呈する。この溝の延長線上に方形周溝墓2の東辺が位置する。方形周溝墓群築造時の基準となる溝の可能性が考えられる。

溝71 (図14) 1区から2区にまたがる位置で確認した南北方向の溝である。検出長約7.3m、幅約2.3m、深さ約0.25mである。断面形は浅いU字状を呈する。埋土は主に黒褐色砂泥が堆積する。埋土から弥生土器が出土した。溝の西側は攪乱により失われている。溝の南端は溝9によって失われているため、調査区外に続くか、調査区内でおさまるか不明である。

(3) 第1面-1 (奈良時代以前) の遺構 (図15、図版2)

掘立柱建物1 (図16、図版3) 1区北西部で検出した南北3間×東西3間以上の掘立柱建物である。柱間は1.6～1.8mであるが、南北方向の2間目が狭く約1.2mとなる。南北の2間目の中心から建物の内側へ1.4mの地点で、棟持柱を検出した(柱穴31)。建物の西側は調査区外へさらに広がる。方位は、北に対して東へ約51°振る。柱掘形は隅丸方形と円形のものがある。大きさは、円形ものが径0.26～0.36m、隅丸方形のものが一辺0.54～0.62m、深さ約0.1～0.2mである。全ての柱穴で柱痕跡を確認することができた。柱痕跡から推測できる柱径は0.1～0.15mである。遺物の出土がないことから、時期は不明であるが、建物方位から奈良時代以前と考えられる。

(4) 第1面-2 (平安時代中期) の遺構 (図15、図版2)

井戸、溝、柱穴、土坑などを確認した。以下、主要な遺構について記す。

井戸5 (図17、図版3) 1区中央部やや東寄りで検出した。井籠組の井戸である。掘形の平面形は隅丸方形、断面形は西と南側の途中に平坦面をもつ、二段掘り状となる。大きさは一辺2.2m、深さ約1.6mである。掘形の北東隅に寄せて井戸枠が設けられている。井戸枠の平面形は、正方形で、一辺の内法が0.9mである。井戸枠には板材を用い、東西の枠材で南北の枠材を挟みこむ。板材の大きさは、長さ90～95cm、高さ約24cm、厚さ約2cmである。掘形の底に小ぶりの石を置き、その上に井戸枠を組み上げる。井戸の底には、楕円形の水溜が掘りこまれる。水溜の大きさは、南北0.65m、東西0.58mである。水溜は、掘形がほぼ垂直に立ち上がることから曲物が据えられていた可能性がある。

埋土からは土器類や瓦類、鉄釘、銭貨、骨が出土した。土器や瓦類には被熱したものが多い。

溝9 (図18、図版3) 1・2区南端で検出した東西方向の溝である。検出長約12.5m、深さ約0.3mである。溝の南肩は調査区外になるため、幅は不明である。検出幅は1.15～1.5mである。断面形は緩やかなU字状を呈する。埋土は、上層と下層に分かれ、上層には黒褐色土、下層には黄褐色のブロック土が混じる黒褐色土が堆積する。

2区西半では検出できなかったものの、50m西側で行った31次調査で検出した溝とほぼ同一ライン上になることから同時期に機能していた可能性がある。

溝60 (図18) 2区中央で検出した東西方向の溝である。検出長約10m、幅0.7～1.1m、深さ0.1～0.2mである。溝の西側は調査区外に続く。断面形は緩やかなU字状を呈する。埋土は、上層と下層に分かれ、上層にはにぶい黄褐色砂泥、下層には黒褐色砂泥が堆積する。埋土上層から瓦類や土器がまとまって出土した。土器や瓦類には被熱した痕跡があるものもみられる。

溝66 1区南部で検出した。溝60と連続する可能性はあるが、攪乱によって分断されているため判然としない。

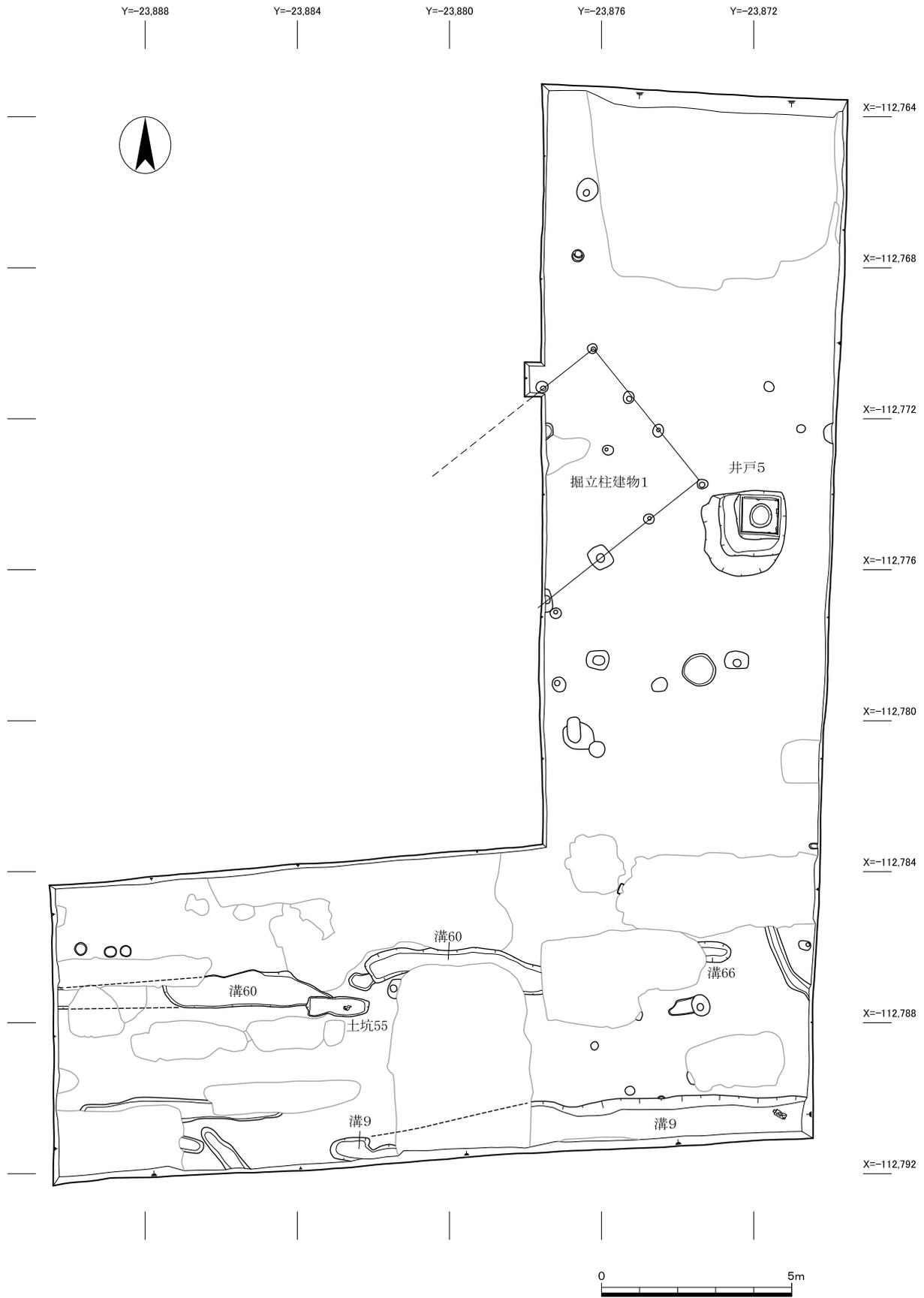
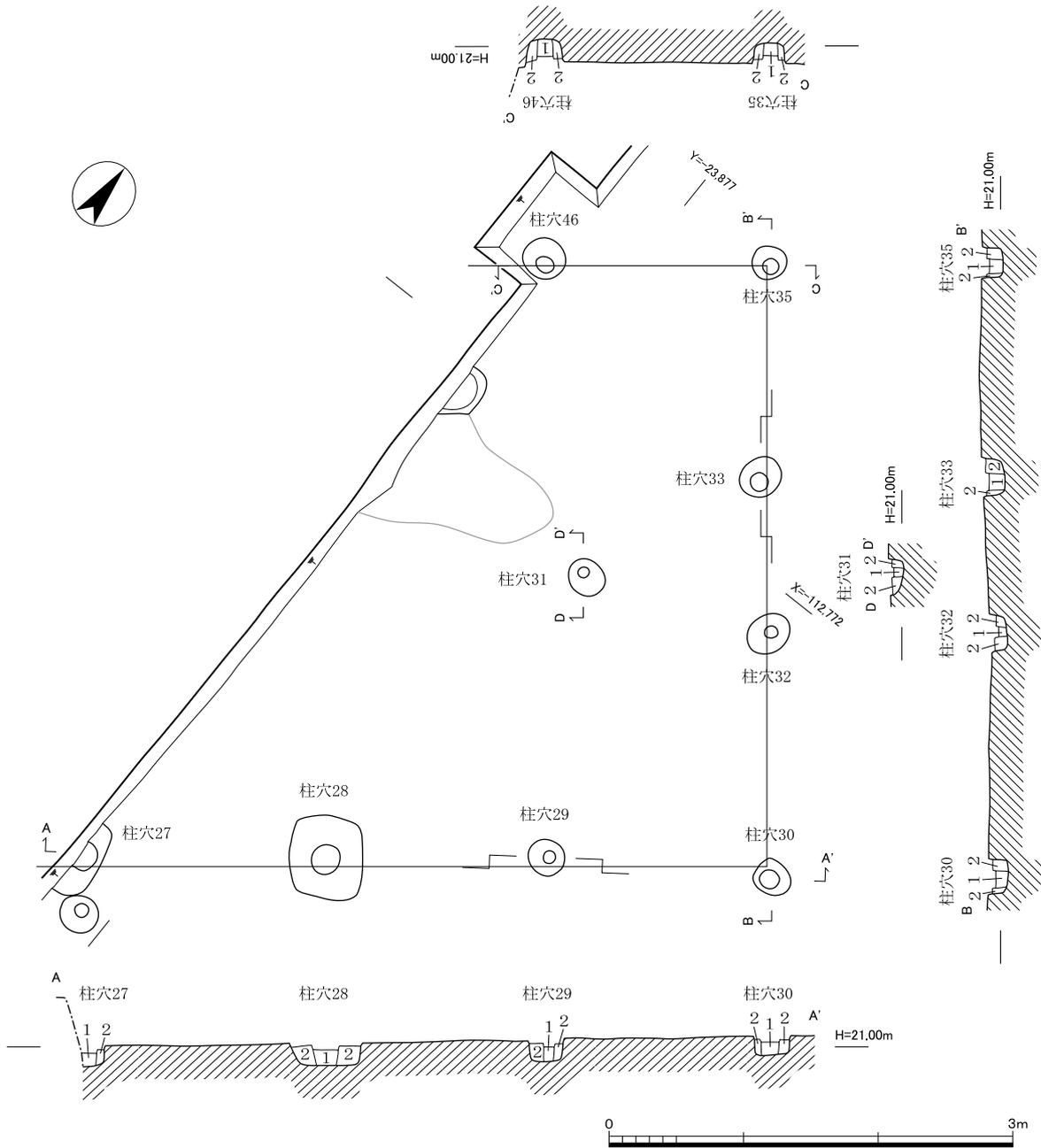


図15 第1面平面図〔奈良時代以前・平安時代〕(1 : 150)



柱穴27

- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭微量含む
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 炭微量含む

柱穴28

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 炭微量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1cm程度の礫微量、炭微量含む

柱穴29

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥 炭微量含む
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 小礫微量、炭微量含む

柱穴30

- 1 10YR2/1黒色砂泥 炭微量含む
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 炭微量含む

柱穴31

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 炭微量含む

柱穴32

- 1 10YR2/1黒色砂泥 炭微量含む
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cm程度の礫少量、炭微量含む

柱穴33

- 1 10YR3/1黒褐色砂泥 炭微量含む
- 2 10YR4/1褐灰色砂泥 φ1cm程度の礫微量、炭微量含む

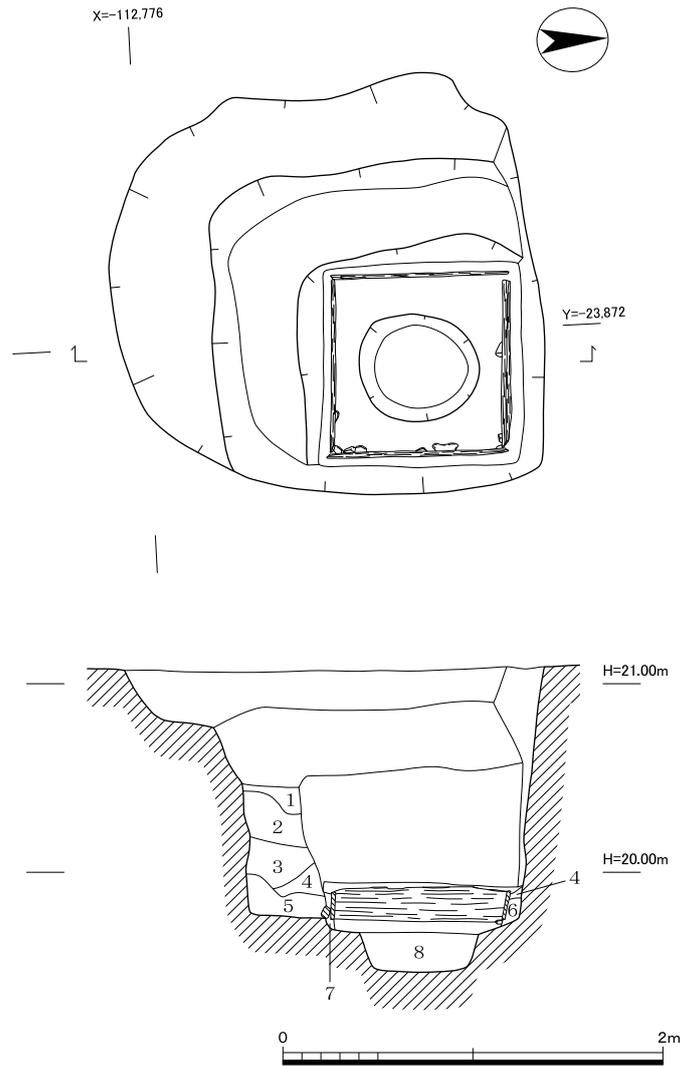
柱穴35

- 1 10YR3/1黒褐色砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cm程度の礫微量含む

柱穴46

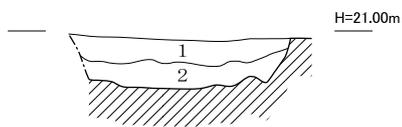
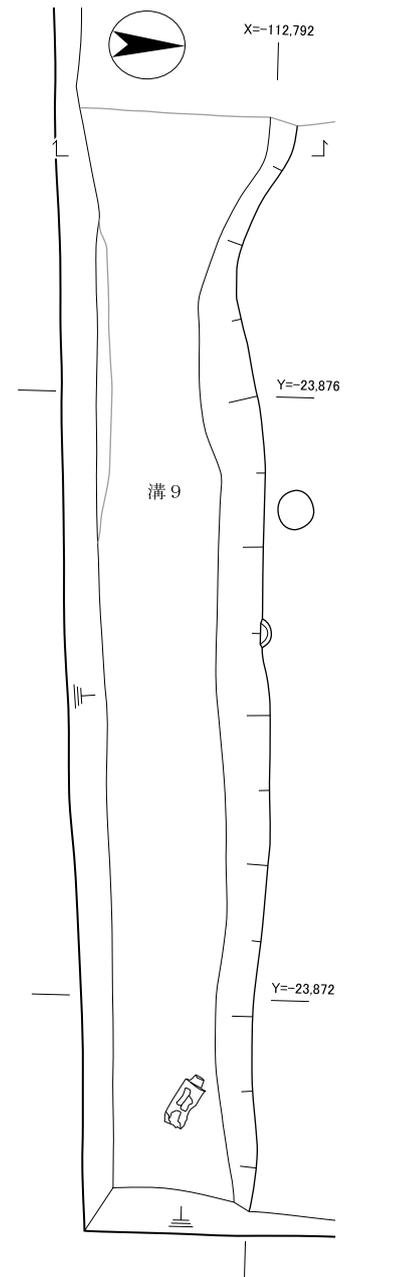
- 1 10YR2/2黒褐色砂泥に10YR4/2灰黄褐色砂泥ブロック混炭微量含む
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ1cm程度の礫微量、炭微量含む

図16 掘立柱建物1実測図 (1:50)

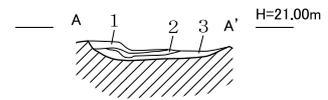
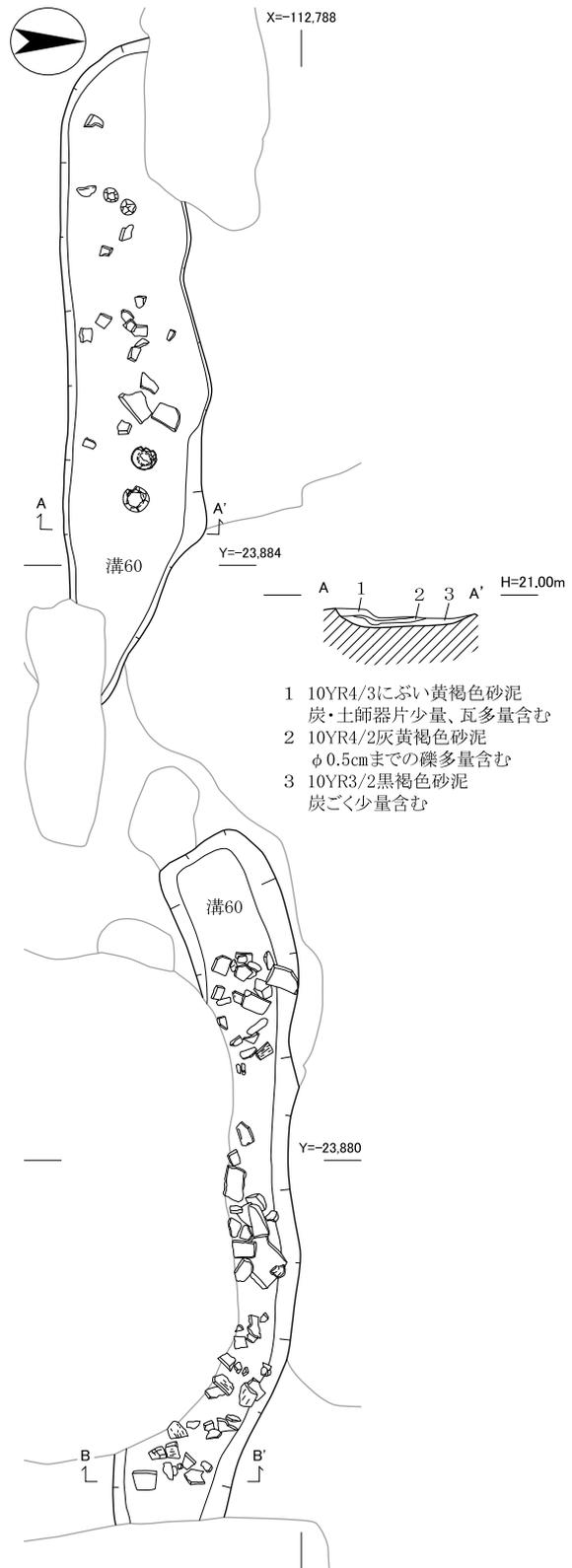


- 1 10YR3/1黒褐色砂泥 やや粘質 固く締まるに10YR4/4褐色砂泥ブロック少量混 炭少量含む
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥 砂礫混じり
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥 粗砂混じり
- 4 10YR4/1褐灰色シルト 粗砂混じり
- 5 10YR3/1黒褐色粘土
- 6 10YR3/1黒褐色シルト φ3~8cmの礫少量含む
- 7 10YR3/1黒褐色砂泥 やや粘質 φ1~2cmの礫多量含む
- 8 10YR4/1褐灰色粘土 φ2~6cmの礫少量、炭少量含む(埋土最下層)

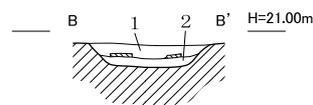
図17 井戸5実測図 (1 : 40)



- 1 10YR3/1黒褐色砂泥 炭・土師器片ごく少量含む
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥に
10YR4/3にぶい黄褐色砂泥ブロック少量混 炭少量含む



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
炭・土師器片少量、瓦多量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥
φ0.5cmまでの礫多量含む
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥
炭ごく少量含む



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭・土師器片少量、瓦多量含む
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥 炭ごく少量含む

図18 溝9・60実測図 (1:50)

4. 遺 物

調査では整理コンテナにして32箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、骨がある。土器類が約4割、瓦類も約4割である。土器類では平安時代中期の遺物が最も多く約8割を占め、次いで弥生時代となる。

以下では主要な遺構から出土した遺物について種別ごとに概要を述べる。

(1) 土器類

弥生時代の土器類 (図19、図版4)

方形周溝墓の周溝と溝71、攪乱からも出土しているが、その多くが小片のため、実測に耐えないものが多い。時期は弥生時代中期前葉である。

方形周溝墓2出土土器(7) 7は甕の底部片である。外面はヘラミガキ、内面は磨滅のため調整は観察できない。

方形周溝墓4出土土器(1・2・4～6・8・9) 本調査において、最も多くの弥生土器が出土したが、破片資料が多く、図化できないものが多い。

1は壺の頸部片である。ヘラ描直線文が1条確認できる。

2も壺の頸部片である。ヘラ描直線文を2条確認できる。

4は無頸壺である。口縁端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。胎土に角閃石を多く含む、いわゆる生駒西麓産土器である。最大径をほぼ体部中央にもつ球形で、口縁部はわずかに外反する。底部には、2孔1組の孔を対称の位置に穿つ。体部外面には文様を施す。頸部から底部に向かって、櫛描直線文、鋸歯文、櫛描直線文、流水文を施す。この流水文は櫛描直線文9条を1単位として割り付けられ、そのうち5条が次の流水文と共有する。中期前葉に属する。

5は壺の底部片である。外面はヘラミガキとナデ、内面ナデ調整である。

6も壺の底部片である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

表3 遺物概要表

| 時代 | 内容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|--------|--|--------|---|--------|--------|
| 弥生時代中期 | 弥生土器、石器、石製品 | | 弥生土器9点、石器4点 | | |
| 古墳時代 | 須恵器 | | 須恵器1点 | | |
| 平安時代中期 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、黒色土器、瓦、銭貨、金属製品、獣骨 | | 土師器11点、須恵器2点、緑釉陶器4点、灰釉陶器5点、白色土器2点、黒色土器6点、軒丸瓦4点、軒平瓦3点、丸瓦1点、平瓦4点、銭貨1点 | | |
| 合計 | | 39箱 | 57点(7箱) | 1箱 | 31箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

8は甕の底部片である。外面はヘラミガミ、内面はナデ調整である。

9は甕である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部は面をつくる。体部外面はハケ目、内面はナデ調整である。

調査区北半出土土器 (3)
3は方形周溝墓1・2付近の検出中に出土した。壺の頸部片である。ヘラ描直線文を5条確認できる。

古墳時代の土器類 (図20)

溝60から平安時代中期の土器類や瓦類とともに須恵器が1点出土した。

10は須恵器の杯蓋である。天井部上半は回転ヘラケズリ、天井部下半と口縁部は回転ナデ、内面は天井部内面が不正方向ナデ、それ以外は回転ナデ調整である。MT15型式である。

平安時代の土器類 (図21、図版4)

井戸5出土土器 (11~28) 土師器皿・高杯・甕・羽釜、黒色土器椀・柄付き杓、須恵器小壺・壺、緑釉陶器皿、灰釉陶器皿・椀・壺が出土した。京都Ⅲ期古~中段階¹⁾に属する資料である。

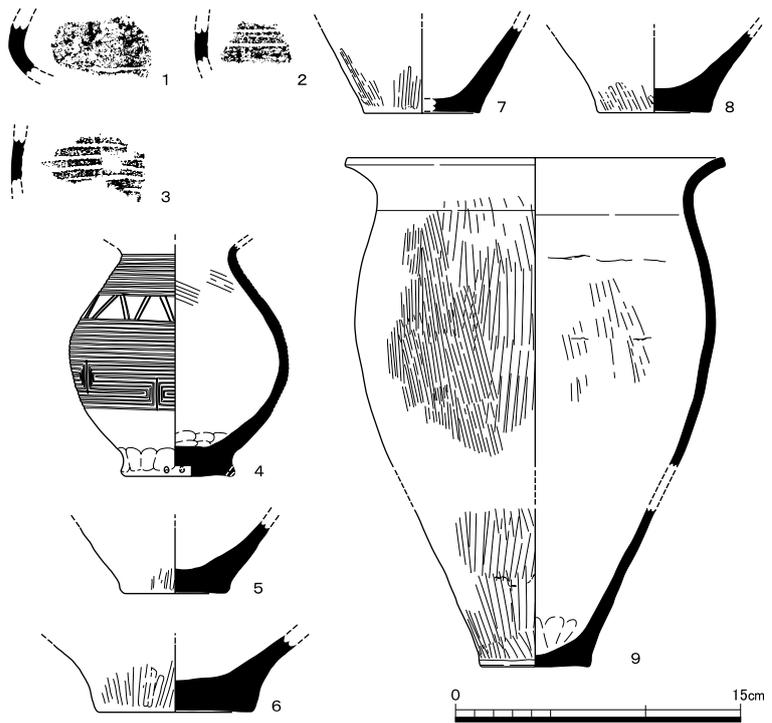
11~16は土師器である。11~13はいわゆる「て」の字状口縁の皿である。口径は13.0~14.0cmである。外面は底部下半はオサエ、口縁部はヨコナデ、内面はヨコナデ。14は高杯で、脚部の面取りは9面である。15は甕、体部外面をハケ目、内面をオサエ後ナデ。16は羽釜である。

17~19は黒色土器である。17と18は黒色土器Aの椀である。19は柄付き杓の柄の部分のみが残存する。上面のみが黒色処理される。

20・21は須恵器である。20は壺底部の破片である。21は耳付き壺の破片である。肩部から体部にかけての破片と考えられる。

22~24は緑釉陶器の皿の底部である。22は平高台で削り出しによる。内外面に緑釉が薄く施される。焼成は軟質である。山城産。23は輪高台で貼り付けによる。内外面に緑釉が薄く施される。東海産。24は輪高台で削り出しによる。内外面に緑釉が薄く施される。山城産。

25~28は灰釉陶器である。25の高台の断面形は方形を呈する。全体に磨滅が著しい。26の高台の断面形は三角形を呈する。27の高台の断面形は三日月状を呈する。28は壺の体部から底部。



1・2・4~6・8・9:方形周溝墓5 3:調査区北半 7:方形周溝墓2

図19 弥生土器実測図 (1:4)

図20 古墳時代の土器実測図 (1:4)

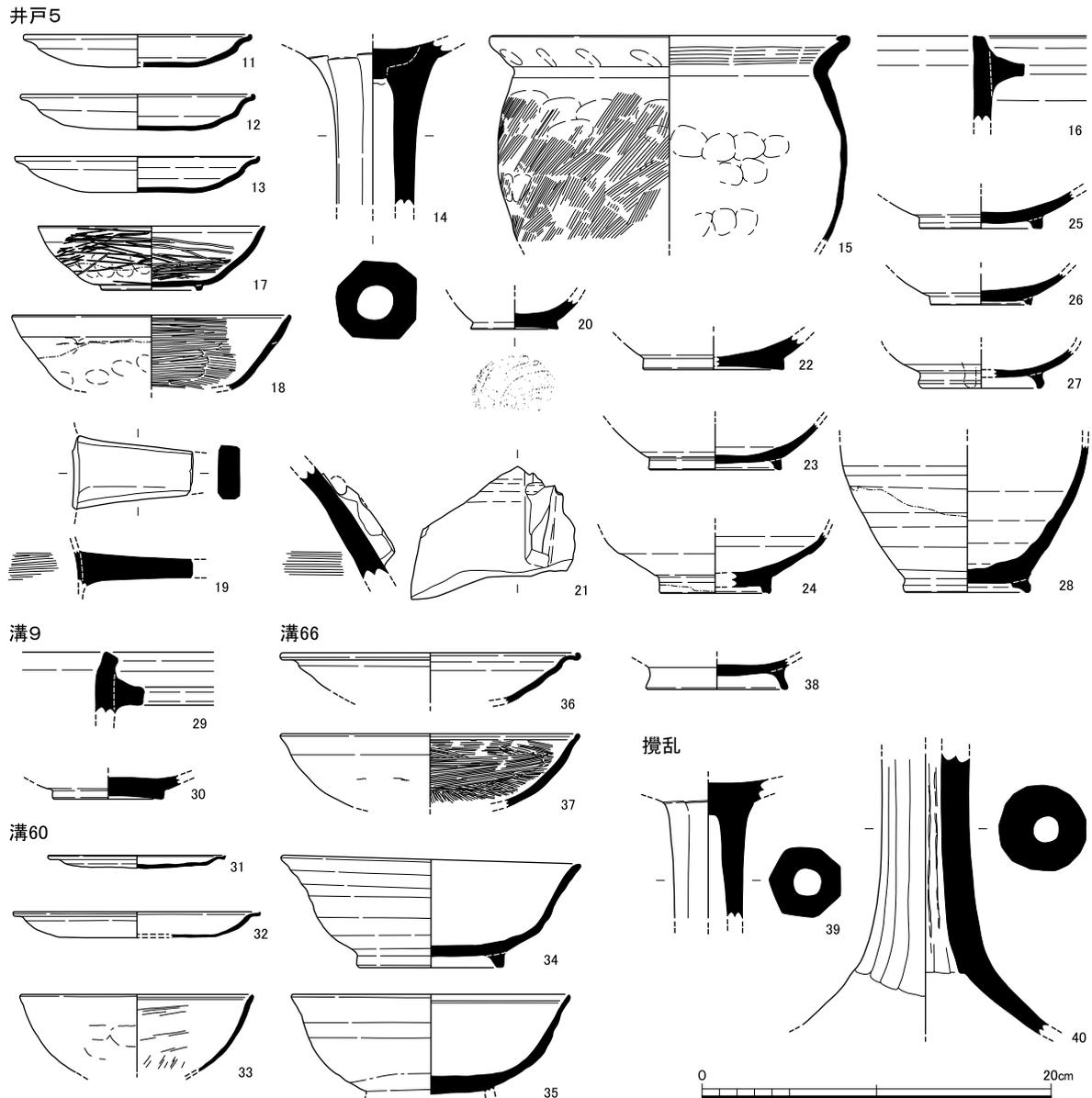


図21 平安時代の土器実測図（1：4）

溝9出土土器（29・30） 土師器皿・羽釜、黒色土器、須恵器壺・甕、緑釉陶器皿、灰釉陶器が出土した。その多くが小片で、図化できないものが多い。

29は土師器の羽釜である。30は緑釉陶器の皿である。高台は削り出しの平高台で、内外面に緑釉が施される。焼成は軟質。山城産。

溝60出土土器（31～35） 土師器皿・高杯・羽釜、黒色土器碗、須恵器甕、緑釉陶器、白色土器碗、灰釉陶器碗が出土した。京都Ⅲ期中～新段階に属する資料である。

31・32は、いわゆる「て」の字状口縁の土師器皿である。口径は10.1cmと14.1cmである。

33は黒色土器の内黒の碗である。

34は白色土器の碗である。高台は貼り付けの輪高台である。体部外面を丁寧になでる。

35は灰釉陶器の碗である。高台は意図的に外されたと考えられる。部分的に残っている高台も削り取ろうとしたようで、やや平滑となる。

溝66出土土器（36～38） 土師器皿、黒色土器椀、須恵器甕、緑釉陶器皿、灰釉陶器が出土した。京都Ⅲ期中～新段階に属する資料である。

36は、いわゆる「て」の字状口縁の土師器皿である。口径は16.9cmとやや大型で深い。

37・38は黒色土器である。37は体部の破片で、内黒の椀である。内面に丁寧なヘラミガキを施す。38は底部の破片で、高台は貼り付け高台である。

その他の土器（39・40） 調査区南側で溝60を切り込む別々の攪乱から出土した。

39は土師器の高杯である。脚部の面取りは7面である。

40は白色土器の高杯である。脚部の面取りは幅が狭い。脚部内面に被熱を受けた痕跡が確認できる。

（2）瓦類（図22・23、図版5）

瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土した。刻印をもつ瓦も確認できる。出土した瓦類は、おおむね西寺所用瓦に該当する。溝60からややまとまって出土している他は、近世以降の攪乱出土が多くを占める。被熱を受け、炭化物が付着する瓦が比較的多くみられる。

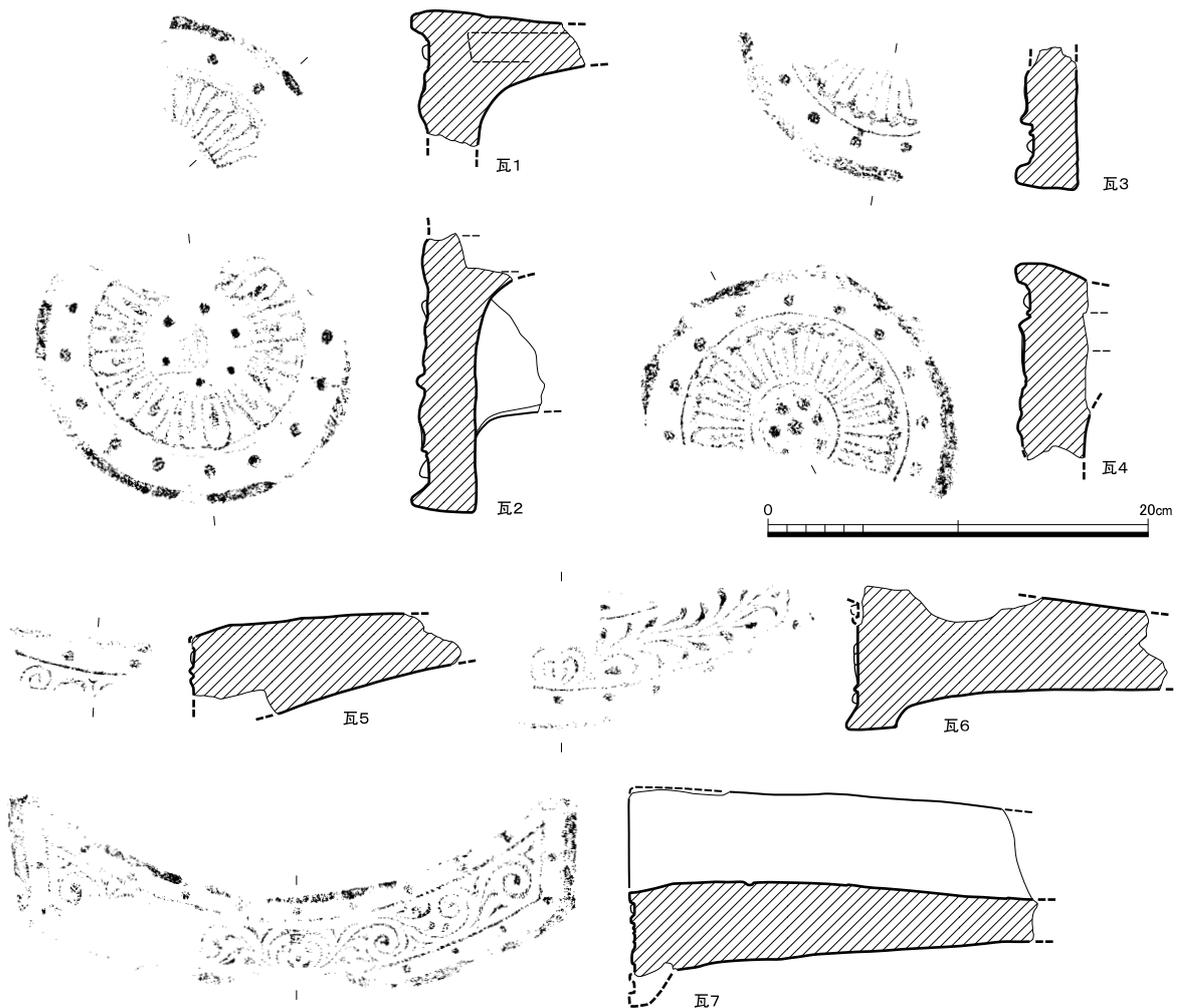
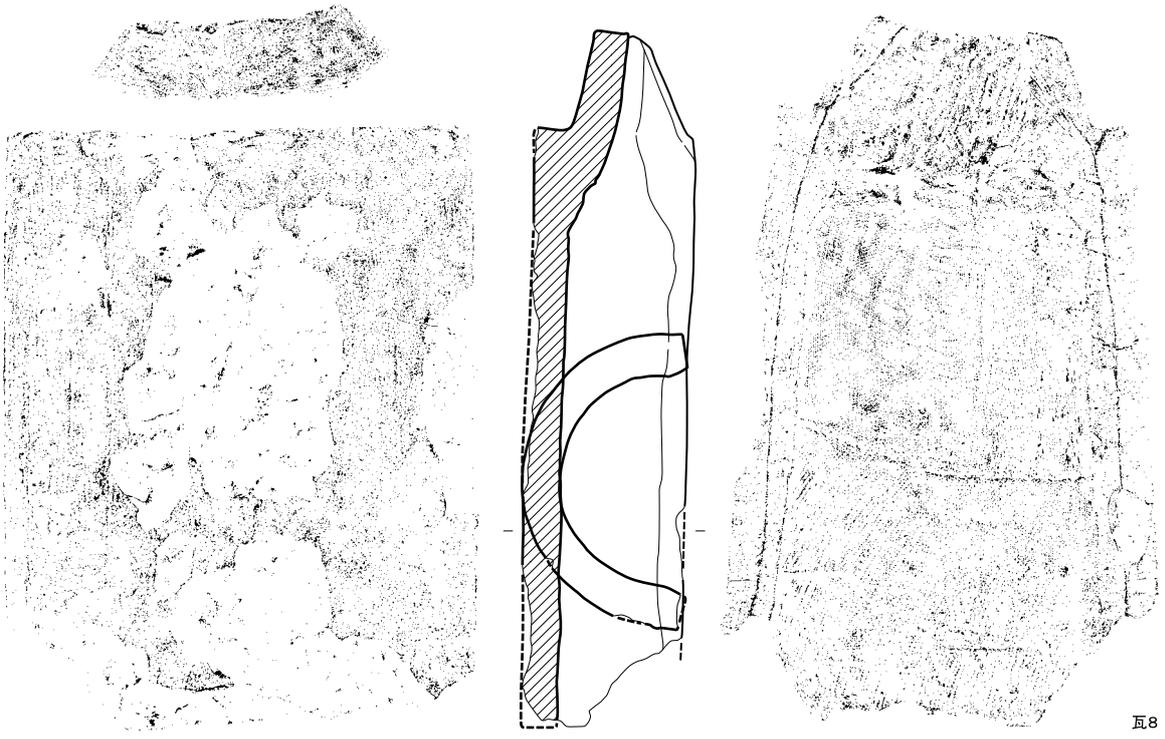
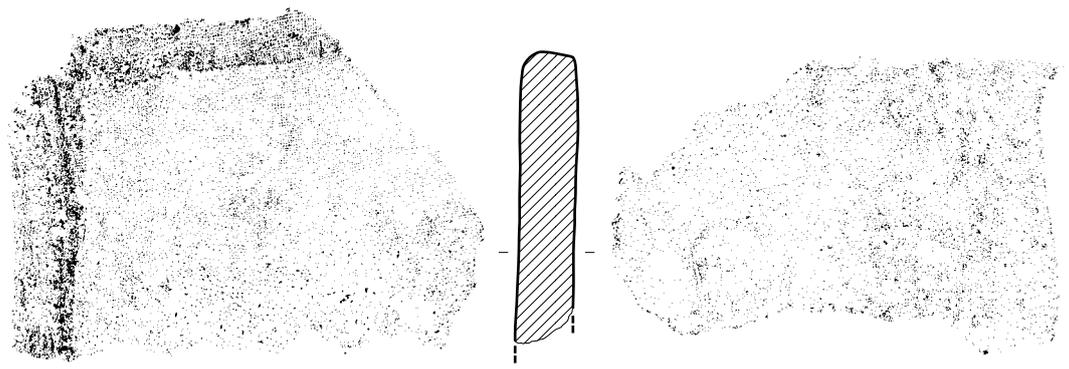


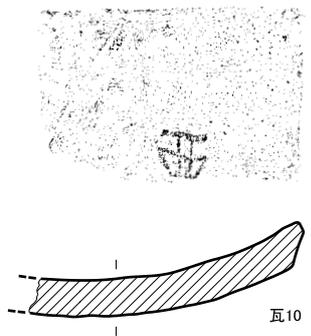
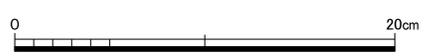
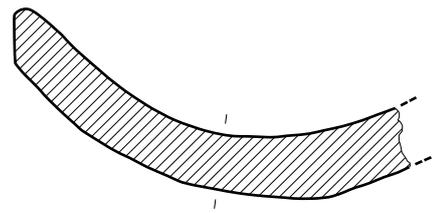
図22 軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）



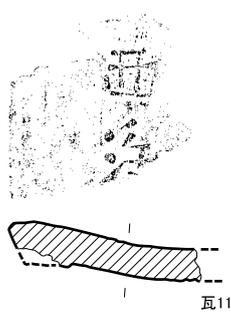
瓦8



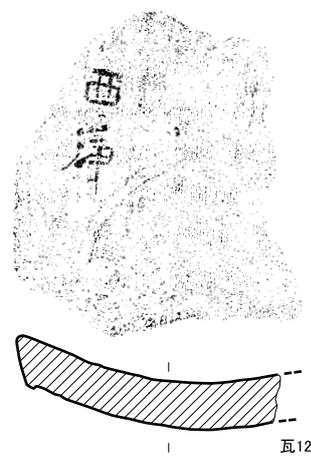
瓦9



瓦10



瓦11



瓦12

图23 丸瓦・平瓦・刻印瓦拓影及び実測図（1：4）

瓦1は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。攪乱から出土した。瓦当部裏面はナデ、側面はケズリ。焼成は良好である。被熱痕があり、炭化物が付着する。

瓦2は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。攪乱から出土した。瓦当部裏面・側面はともにナデ。焼成は良好である。被熱痕があり、炭化物が付着する。中房の中心部は磨滅しているが、「西寺」銘があったと思われる。

瓦3は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。溝9から出土した。瓦当部裏面はナデ、側面はケズリ。焼成は良好である。被熱痕があり、炭化物が付着する。

瓦4は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。攪乱から出土した。瓦当部裏面はナデ、側面はケズリ。焼成は良好である。被熱痕があり、炭化物が付着する。

瓦5は均整唐草文軒平瓦である。攪乱から出土した。瓦当部凹面は横方向のケズリ。平瓦部凸面は縦方向のケズリ、凹面は磨滅のため不明。焼成は良好である。主葉は強く巻き込み、支葉は「Y」字状を呈する。被熱痕を確認できる。これまで西寺で出土している瓦の中では同文と判断できるものは確認できていない。

瓦6は均整唐草文軒平瓦である。攪乱から出土した。瓦当部凸面は横方向のケズリ。平瓦部凸面は縦方向のケズリで一部に布目が残る、凹面の布目は粗い。焼成は良好である。

瓦7は均整唐草文軒平瓦である。溝60から出土した。中心飾りは上向きC字の中に三葉を配置し、上部に「西」字を刻む。唐草文は両側に3反転する。瓦当部凸面・凹面はともに横方向のケズリ。平瓦部凸面は縦方向のケズリで一部に布目が残る、凹面の布目は粗い。焼成は良好である。

瓦8は、ほぼ完形の丸瓦である。溝9から出土した。凸面は縄タタキ、凹面は細かい布目が残る。

瓦9は平瓦である。溝60から出土した。凹面から凸面にかけて連続した細かい布目が残る。

瓦10～12は刻印瓦である。瓦10は「西」のみが残存するが、字体の特徴から「西瓦因」の刻印瓦と判断できる。瓦11・12は「西浄」。

(3) 銭貨 (図24)

銭1は井戸5から出土した。神功開寶で、初鑄は天平神護元年(765)である。直径2.5cm、厚さ0.2cmである。残存状況はやや良好である。

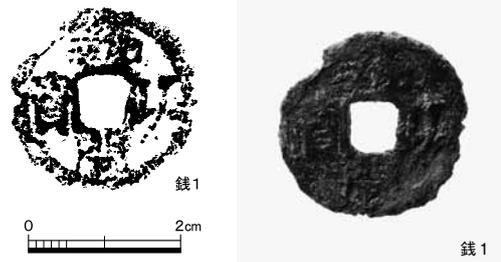


図24 銭貨拓影及び写真(1:1)

(4) 石製品 (図25)

敲石、石皿、磨製石器片や石器未成品が出土した。全て弥生時代に属する石器と考えられるが、石3が弥生時代の遺構から出土した以外は、後世の遺構や攪乱からの出土である。図化はしていないが、攪乱から石4と似た未加工の石材も出土している。

石1は磨製石製品の破片である。溝71から出土した。残存長5.7cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmである。石材は粘板岩。表面に擦痕が観察できる。

石2は石製品の未成品と考えられる。攪乱から出土した。残存長13.3cm、幅4.9cm、厚さ1.1cmで

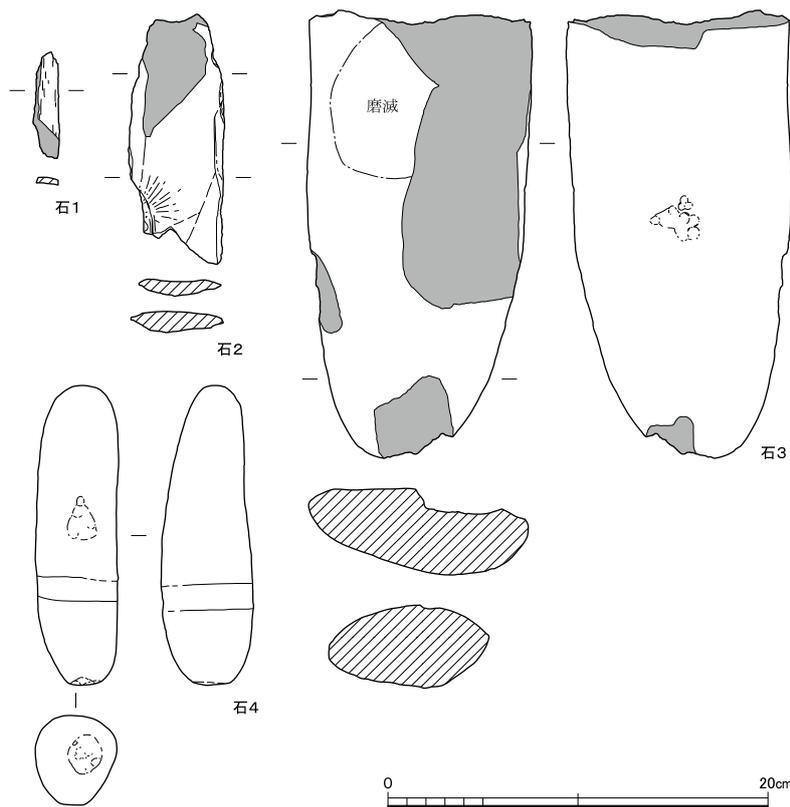


図25 石器実測図（1：4）

ある。表面は剥離面で形成されており、研磨された痕は確認できない。制作途中の未製品と考えられる。石材は粘板岩。

石3は石皿である。溝60から出土した。残存長24.2cm、最大幅11.5cmである。半分程度が欠損していると考えられる。横断面形は、端部よりが横長の楕円形、磨り面部分が逆蒲鉾形を呈する。磨り面部分はわずかに窪み、表面は滑らかである。石材は堆積岩の一種と思われるが不明である。裏面の中央付近には、縦2.5cm、横3cm程度の範囲に不

整形の敲打痕が残る。被熱を受けた痕跡もみられる。

石4は敲石である。溝60から出土した。完形品で、長さ15.9cm、最大幅4.3cm、厚さ4.8cmである。平面形は細長の石材でわずかに湾曲する。断面形は歪んだ円形を呈する。石材は砂岩である。全長の三分の一程度のところで、長軸に直行するように帯状にわずかに窪む。窪み部分の表面はやや荒れている。幅は1.5cm程度である。この帯状の窪みより端部に向かって徐々に細くなっていく。この部分の表面は平滑で、磨滅しており持ち手となる。持ち手部分の一部に敲打痕がみられる。持ち手部分と反対側の端部が敲打面になる。

(5) 骨

井戸5から獣骨が2点出土している。1点はシカの角、もう1点はウマの中足骨左遠位と思われる。ウマの中足骨左遠位と思われる獣骨は、残存長約16cm、厚さ約3.5cmである。片側の端部が欠損する。遺存状態は比較的良好である。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

| 750頃 | 840頃 | 930頃 | 1010頃 | 1080~90頃 | 1180頃 | 1270頃 | 1360頃 | 1440頃 | 1500頃 | 1580~90頃 | 1660頃 | 1740年代頃 | 1820年代頃 | |
|------|------|------|-------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|----------|-------|---------|---------|---|
| I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | IX | X | XI | XII | XIII | XIV | |
| 古 | 中 | 新 | 古 | 中 | 新 | 古 | 中 | 新 | 古 | 中 | 新 | 古 | 中 | 新 |

5. まとめ

今回の調査では、唐橋遺跡に伴う弥生時代中期前葉の方形周溝墓、奈良時代以前の掘立柱建物、平安時代の西寺に伴う井戸や溝などを検出した。

弥生時代 方形周溝墓を4基検出した。直行する2辺の長さを確認できた周溝墓がなかったため正確な規模は不明であるが、最も大きい周溝墓4では一辺の長さが10m以上となり、この時期のものとしては大型のものである。

溝の前後関係から、周溝墓1→周溝墓2、溝73→周溝墓2、溝73→周溝墓3が確認できた。周溝墓2と3は重複関係にないため、前後関係は判断できない。前後関係を整理すると、溝73・周溝墓1→周溝墓2・3となる。

調査区北半で確認した周溝墓1～3と南半の周溝墓4では周溝の特徴が異なっていて、周溝墓1～3は幅が狭く深いのに対し、周溝墓4は幅が広く浅い。両者の違いは遺物の出土状況にもみられ、周溝墓1～3からの出土遺物が少なかったのに対し、周溝墓4からは比較的多く出土した。

周溝墓4から出土した土器で特長的なものは、角閃石を多く含む短頸壺で、いわゆる生駒西麓産の搬入品である。櫛描直線文や鋸歯文、流水文などで装飾される。他に出土した土器には、ヘラ描直線文が施された壺の破片も含まれる。土器の特徴から中期前半でもやや古相と判断できる。周溝墓1～3の周溝に伴う時期を明確に判断できる土器の出土はなかったが、検出中に周溝墓1・2周辺でもヘラ描直線文が施された土器片が出土しており、周溝墓1～4の構築に大きな時間差はなかったと想定したい。

弥生時代中期前葉の方形周溝墓を、30次調査に続いて本調査地においても検出することができ、墓域が面的な広がりをもつことが確認された点は大きな成果といえよう。

奈良時代以前 掘立柱建物1棟を検出した。建物の規模は、南北3間×東西3間以上である。時期の判断できる遺物は出土していない。建物方位が北東方向に傾いており、平安京遷都後であれば条坊に沿って建物の軸をほぼ東西南北に揃えると考えられることから、それ以前の時期の建物と判断した。

平安時代 井戸、溝、柱穴、土坑を検出した。

調査区内に針小路北築地塀推定ラインが位置しているが、30次調査や31次調査で得られた成果と同様に、針小路に関連する遺構は検出されなかった。

調査区南端で検出した東西方向の溝9は、31次調査で検出した東西方向の溝の東側延長線上に位置することや、出土遺物が同時期に属することから、同一の溝と考えられる。九条一坊十町（政所院）と九町（大衆院）を区画する溝と考えられる。

この溝9の北側で並行する溝60を検出した。東側は調査区内でおさまり、西側は調査区外に続く。溝9とは遺物の出土量や状況が異なり、溝9からは瓦や土器類の出土が少ないのに対し、溝60からは瓦がまとまって出土している。溝60は、30・31次調査では検出されていないことから、その延長距離は比較的短いことがわかる。建物に伴う雨落溝あるいは敷地内の区画溝の可能性が考

えられる。この溝60より北側では井戸を検出した。井戸に対応する建物跡は検出できていない。

針小路関しては、30・31次調査と今回の調査によって条坊設計の位置には敷設されていないことが明らかとなった。先に述べた様に今回調査と31次調査では、本来は針小路路面のほぼ中央の位置で一連と考えられる10世紀の東西溝を検出しており、九条一坊九町と十町、十五町と十六町のそれぞれを南北で分割する区画溝と考えられる。30次調査を含め針小路北築地推定ラインでは、これに先行する針小路関係の遺構を検出していない。このことから上記4町は、平安遷都後間もなく開始する西寺造営当初から、寺域であったことがほぼ確定したといえる。

一方でこの溝の北側、寺域内で検出されている遺構は、小規模な掘立柱建物・井戸・溝など生活空間であったことを窺わせるものである。ただし、検出された遺構・遺物は限定的であり、大衆院・花園院推定地の様相が明らかになったとは言い難い。また、遺構の時期はいずれも10世紀であり、その前後の時期の様相については明らかではなく、その変遷などについても今後の課題である。

西寺付属院地4町のうち、九町と十六町はその大半がJR敷地内であることから、今後も調査は限られたものになる。このエリアの調査は十分な問題意識を持って臨むことが必要と思われる。

圖 版



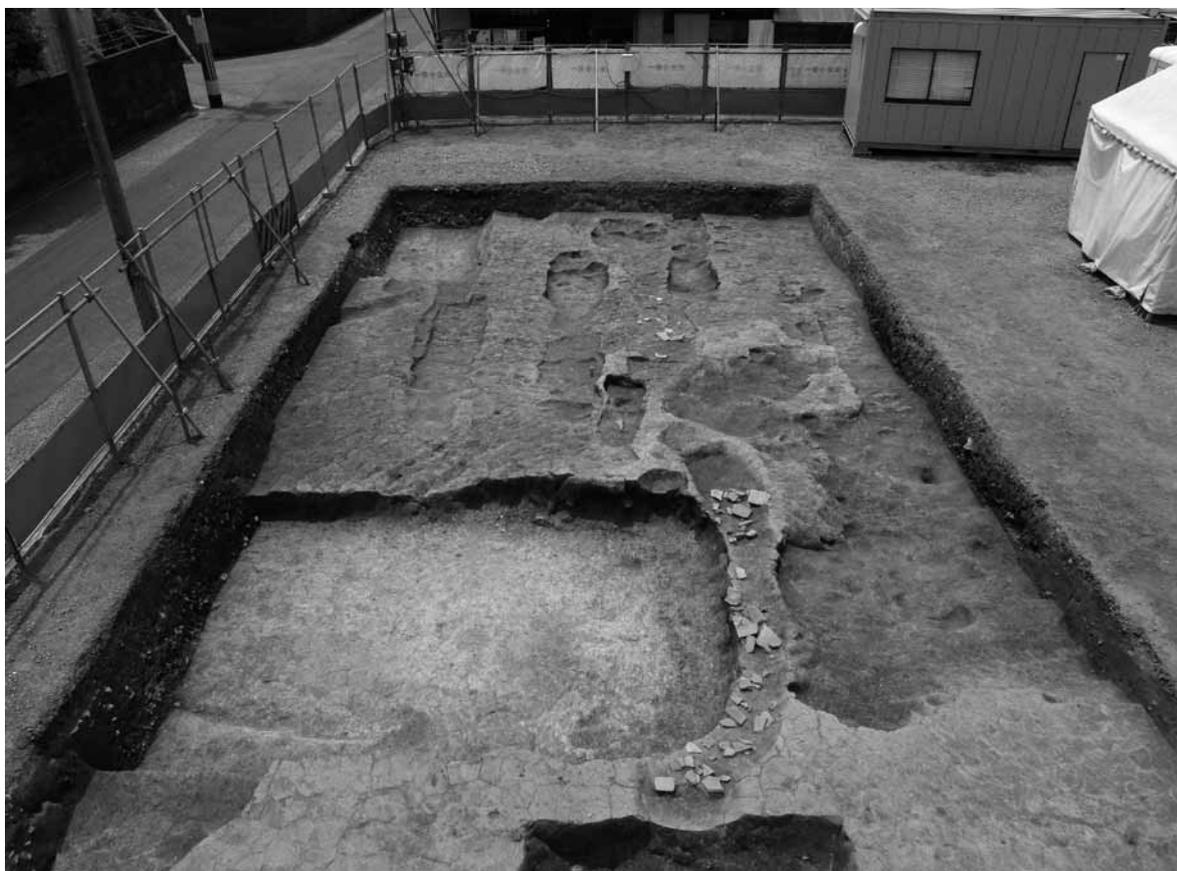
1 1区第2面全景（北から）



2 方形周溝墓4（北西から）



1 1区第1面全景（北から）



2 2区第1面全景（東から）



1 掘立柱建物1（北東から）



2 井戸5（北から）



3 溝9完掘状況（東から）





瓦2



瓦4



瓦5



瓦6



瓦7



瓦8



瓦9



瓦10



瓦11



瓦12

報 告 書 抄 録

| ふりがな | へいあんきょううきょうくじょういちぼうきゅうちょうあと（さいじあと）、からはしいせき | | | | | | | |
|-------------------|--|--------|---------|--|------|---|------|------|
| 書名 | 平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、唐橋遺跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2017-6 | | | | | | | |
| 編著者名 | 鈴木康高 | | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2017年11月30日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| へいあんきょうあと 平安京跡 | きょうとしみなみく 京都市南区 | 26100 | 1 | 34度 | 135度 | 2017年5月 22日～2017 年6月29日 | 313㎡ | 宅地造成 |
| さいじあと 西寺跡 | からはしかどわきちょう 唐橋門脇町 | | 755 | 58分 | 44分 | | | |
| からはしいせき 唐橋遺跡 | 21、22-1 | | 756 | 59秒 | 18秒 | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 平安京跡 | 都城跡 | 弥生時代中期 | 方形周溝墓、溝 | 弥生土器、石器、石製品 | | 弥生時代中期前葉の方形周溝墓を4基検出した。西寺大衆院推定地でその南限溝を検出した。また条坊道路である針小路は、西寺の寺域内では敷設されていないことが明らかとなった。 | | |
| 西寺跡 | 寺院跡 | 奈良時代以前 | 掘立柱建物 | | | | | |
| 唐橋遺跡 | 集落跡 | 平安時代中期 | 溝、井戸、土坑 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、黒色土器、瓦、銭貨、金属製品、獣骨 | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-6

平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、
唐橋遺跡

発行日 2017年11月30日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961